フォーラム まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす　第４回

# 高燥の地への道標

## ― 大正・昭和初期から、浦和・大宮が目指したまち ―

2025年3月15日（土）14:00～16:30　埼玉会館 ラウンジ

― 記 録 目 次 ―


**第1部「耕地整理によって田園郊外へと変貌した戦前の浦和と大宮」（安野 彰）**

「高燥の地」とは・・・

大正初期における住宅地としての鹿島台に対する眼差し・・・・・・・・・・・・・・・・・9
住宅地開発に援用された耕地整理法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
浦和と大宮の耕地整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
確定図から見える町割り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
一方、農地はどこへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
絵描き村と言われた鹿島台と奥瀬英三邸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
大宮公園はまず旅館街に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
家族向けの娯楽の場となる大宮公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
田園都市として居住環境がいい大宮、浦和に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

**第2部「詩人・立原道造を惹きつけた浦和の魅力」（津村 泰範）**
自己紹介～修復建築家としての最近の仕事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
長岡造形大での活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
いかに直さない修復をするか？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
近代化遺産の岩手銀行赤レンガ館に世界が注目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
「夢の継承事業」で出来たヒアシンスハウス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
別所沼のそばの高台に住んだ神保光太郎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
神保光太郎宛の頻繁な書簡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
大学卒業後の勤めで挫折？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
ヒアシンスハウスは逃避の場所？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
終の棲家をヒアシンスハウスに求めた？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
アントニン・レーモンドの夏の家から卒業設計へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
立原道造が見ていた文教都市浦和の風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
高燥の地と低湿地の「際」に集まる芸術家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
実際につくってみて、卒業設計の思いが感じられたヒアシンスハウス・・・・・・・・・35

**第3部「清らかな水を求めて」（青山 恭之）**
水道タンクは浦和の水がいい象徴？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
昭和12年の埼玉県南水道組合抄誌にみる「高燥」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
斬新でおしゃれな取水場の建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
鹿島台を「まちあるき」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
耕地整理の碑に刻まれた「高燥」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

**トークセッション（安野 彰、津村 泰範、青山 恭之、会場参加者）**
水辺こそが憩いの場、癒しの場では？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
隅切りから見える大宮と浦和の区画の違い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

***本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。**

# 高燥の地への道標

## ― 大正・昭和初期から、浦和・大宮が目指したまち ―

**山海（進行）：**日本で最初の公会堂と言われる大阪市中央公会堂は1918年に、ついで日本青年館が1925年に、その後1926年に初代の埼玉会館が竣工しました。この後1929年にできる日比谷公会堂より早く開館した埼玉会館ですが、ここに埼玉県民の文化度の高さが感じられます。そこで、その大正から昭和初期にこの浦和がどんな状況だったのか、どんな人たちが住んでいたのかを見てみようとこのフォーラムを始めまして、今日が４回目になります。

まず青山さんから、今回のタイトル「高燥の地への道標」にある「高燥」という耳慣れない言葉をタイトルにした経緯から、お話しいただけますか。

---

**青山 恭之 （あおやま やすゆき）**
1958 年、旧浦和市生まれ。武蔵野美術大学大学院修了。 妻の永田博子とアトリエ・リング一級建築士事務所を主宰、スペース「つきのみちくさ」を運営。 武蔵野美術大学、埼玉大学等での非常勤講師を経て、現在、ものつくり大学非常勤講師。美術と街巡り・浦和実行委員会事務局長。青少年育成浦和高砂地区会会長としても活動。

---

青山：今回のテーマはみんなで練ってきたんですが、こういうテーマはわかんない方がかっこいいかなと。「高燥」ってなんだろうというのが、もしかしたらあるんじゃないかなと思って、捻ってこういうテーマにしたんですが。

大正から昭和の初期にかけての浦和の鹿島台について、今日も皆さんからどこを鹿島台って言うんだと質問があったくらい、住所にもないんですね。さらに新しく移ってきた人たちには、全然わかんないと思うんですが、そのことも含めて、「鹿島台とはどういうところか、高燥とはどういうことか」から、実は浦和は文教都市といわれて文化人がいっぱいいるっていうことの理由を少し問いただしてみようと思います。

では初めに、安野先生からよろしくお願いします。

## 第1部「耕地整理によって田園郊外へと変貌した戦前の浦和と大宮」

---

**安野 彰 （やすの あきら）**
建築史・都市史/博士(工学)、日本工業大学建築学部建築学科教授。東京工業大学（現東京科学大学）大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻博士後期課程修了。文化女子大学造形学部住環境学科(現文化学園大学造形学部建築・インテリア学科)専任講師、 准教授を歴任。
さいたま市（旧大宮市）生まれ、中学・高校とさいたま市（旧大宮市・浦和市）に通学、現在自宅はさいたま市見沼区。

---

### 「高燥の地」とは

安野：日本工業大学の安野と申します。私は近代の建築史とか都市の歴史を研究しているんですけれども、最初は宝塚だとか、遊園地の研究を始めたんですね。遊園地をやっていると、こういった郊外の話が必ず出てくるので、それで郊外開発に関心を持ちました。今はそれに限らず劇場、鉄筋コンクリート、哲学的な話、いろいろやってます。

この辺りのことは直接研究したというよりも、卒論で学生が取り組んでくれたものがありまして、それを思い出しながらまとめてみるということですので、細かいところはちょっと違っているかもしれませんが、ご容赦ください。

今日は、大正から昭和初期にかけて耕地整理というものが浦和と大宮で大々的に行われて、それによって各町が整えられていく話をしていこうと思います。それから、大宮公園がどう整備されていったのか、それが郊外開発にどういう意味を持っていたのかを考察できればと考えております。

まず、「高燥の地」についてですが、こういう字を書きます。「近代の住宅地はこの高燥の地が好まれる。」これは東大の鈴木博之先生(*1)がご著書で書かれていたのを拝借してます。先生いわく「こういう考え方というのは欧米から入ってきた」と述べておられます。欧米の人たちには、「土地が湿っているとそこから瘴気、障りのある空気が上がってきて身体に悪さをするので、低く湿った土地じゃなくて、高く乾燥した土地を住宅地として選ぶことが、健康的な生活にとっていい」と考えられていました。

グラバー邸　1863年

長崎　グラバー園

こういった概念が入ってきて、例えば長崎の居留地にあるグラバー邸ですけれども、こんなふうに高層アパートが見下ろ

(*1) 鈴木博之：（すずきひろゆき1945-2014）日本のモダニズム建築や歴史的建築物の保存運動の礎を築いた東京大学名誉教授。安藤忠雄さんの東大建築学科教授就任の人事、東京駅の駅舎復元、国立競技場コンペの審査員などに関わる。出典：https://ocw.u-tokyo.ac.jp/daifuku23_2008a_final_suzuki/

岩崎家茅町邸　コンドル［東京］1896（明治29）頃

せるような高いところに建っている。横浜でも山手居留地が相当な高台にある。神戸も風見鶏の館とか、北野の異人館も同じように高いところです。こういう土地が、居住地として好まれたわけです。

日本人も洋館を建てていきます。これは岩崎家の茅町邸でコンドル(*2)が設計しています。この建物があるところも台地の突端で、坂をずっと上がっていったらこの正面にたどり着くという環境にあります。平面図を見ると、ここに洋館があってここに和館。和洋館並列というスタイルが目につきますけれども、選ばれている土地も、重要ということです。

## 近代の英国に始まる田園都市構想

住宅づくりで、健康だとか衛生という観点から重視されるのが近代で、英国では田園都市が構想されます。ロンドンの環境が随分悪化して、煤煙も上がって水も悪くなって人が密集して、特に労働者の居住環境は相当悪いことになるわけですね。労働者だけじゃなくて、都市全体の問題ですから、そこに暮らす人みんなの問題になる。

最初はお金持ちの人たちがロンドンの郊外に、ベッドフォード・パークという郊外住宅地、高級ベッドタウンをつくります。リチャード・ノーマン・ショウ（Richard Norman Shaw, 1831-1912）という建築家が設計して、かなりいい邸宅ができ、大変な人気になることで郊外住宅地の開発が始まるとされます。

一方、エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard, 1850-1928)が構想した田園都市というのは、少し違っていまして、これは自立した都市で、職住近接ということになっている。ロンドンに通って仕事するのではなく、この都市の中で完結して仕事と生活を行う。都市の美点と田舎の美点を結婚させましょうという理念が掲げられます。それで重要なのは、「土地は信託財産として、トラストが管理する。市場にはのせない」ということです。ちょっとアンチ資本主義、いわば社会主義的な考えが入ってきてるんですけれども、「田園都市」というのは、職住近接、それから土地環境の維持・保全というのが非常に重要なので、ベッドタウンのような「田園郊外」とは区別されるわけですね。

今回、テーマとして「田園郊外」という言葉を使いましたのは、浦和や大宮は東京のベッドタウンと考えられるので、どちらかというと田園郊外かなと思いまして。田園都市といった方がストレートでわかりやすいんですけれど、こちらの言葉を使っています。

この田園都市は、外側の田園地帯も含めてワンセットです。鉄道がぐるっと町を囲んで、その周囲に工場があって、真ん中には公共施設だとか広場、商店街なんかがあって、それをグリーンベルトを伴った住宅地が囲んでいる。こういったダイアグラムをつくるわけです。この考えをもとに、実際の田園都市がつくられています。

(*2) ジョサイア・コンドル：（Josiah Conder 1852-1920）工部大学校（現東京大学工学部）の建築の教官として明治10年（1877）に英国から来日し、辰野金吾、片山東熊など、そうそうたる建築家群を育て上げ、日本の近代化に大きく貢献した。 https://www.mitsubishi.com/ja/series/people/08/

田園都市の実現例

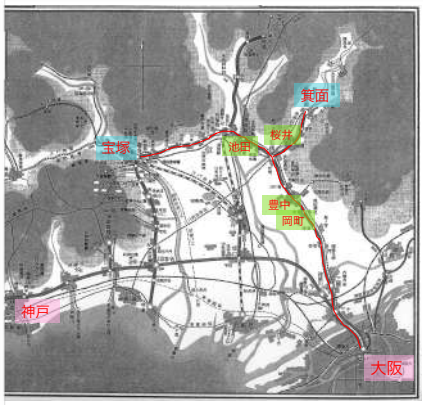
ハワードの理論をベースに、建築家 の S.R. アンウィンと B. パーカー が実現。
W・モリスの影響をうけたアンウィンによる中世的な外観の住宅。

レッチワース　E.ハワード　アンウィン＆パーカー　1902　ロンドン郊外

これは、レッチワース（Letchworth：ロンドン郊外の最初の田園都市）で、アンウィン（Raymond Unwin,1863-1940）とパーカー（Richard Barry Parker,1867-1947）によって設計された田園都市です。アンウィンとパーカーはモリス（William Morris,1834-1896）に影響を受けているので、田園都市自体、アンチ近代というところも入ってますから、中世的とまで行かずとも伝統的な外観の住宅が好まれて、牧歌的なスタイルの風景をつくっていくことになります。

田園都市は、ドイツでも見られます。ドイツは割と国家が肩入れしてつくっているので、少しスタイルが違うんですけれども、それでもドイツらしい外観を住宅に纏わせて、伝統や文化の保全ということも視野に入れていくわけですね。

## 環境悪化の大阪に始まる郊外開発




箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）

明治 39年 12月 22日 軌道敷設申請認可

明治 43年　3月 10日 軌道開通（宝塚線と箕面線）
明治 43年　　池田新市街
明治 43年 11月　1日 箕面動物園開園
明治 44年　5月　1日 宝塚新温泉開業
明治 44年　6月 15日 桜井住宅地売却開始
明治 45年　　岡町住宅地（別会社）

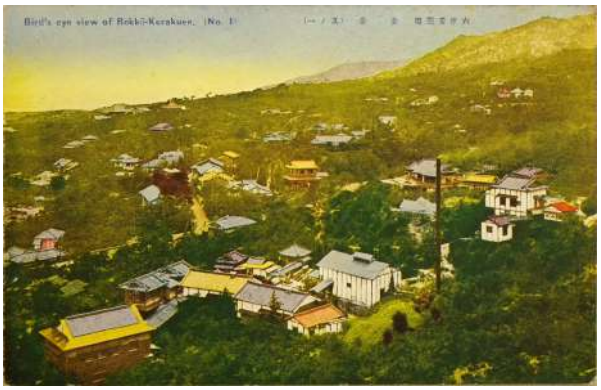
大正　3年　8月 10日 豊中住宅地売却開始

箕面有馬電気軌道の沿線

日本では環境悪化は、まず大阪で起こってきます。大阪は東京と違って武家地が少なかったものですから、町人地で人が密集した周りに工場がたくさんつくられて、環境悪化が著しく早く進むわけです。東洋のマンチェスターとか言われるんですけれども、石炭を燃料にすると、こんなにモクモクとたくさん煤煙が撒き散らされて、公害対策もなかなか取られない時代ですから、環境がどんどん悪化していく。生駒山から大阪を見るといつも、こういった工場の煙で曇って見えない。それほどまでに悪化していく。

大阪市内の様子　『大阪府写真帖』1914（大正3年）より

そうこうしているうちに私鉄が発達して、郊外への移住が進みます。電鉄会社が市外居住の勧めとか、メディアで戦略を打って、郊外に人が移っていくってことが起こります。それで一番いい環境の土地とされたのが阪神間で、六甲の山裾、南東にある斜面には一番いい太陽の光が当たって、いい風が来る。北西の冷たい風は山を通り越して抜けてしまうので、夏も冬も非常に環境がいい。しかも「六甲のおいしい水」という商品があるように、いい水があるの



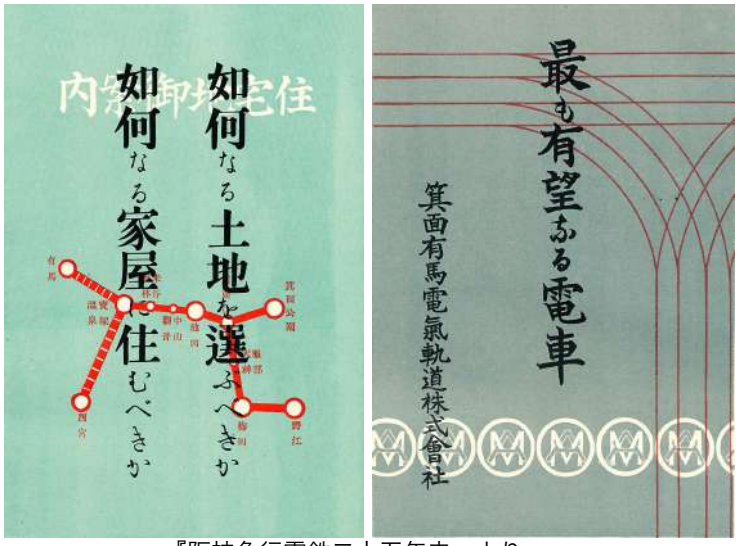
六甲 苦楽園 の 住宅地

で、非常に環境としてはいい。もちろん高燥の地で、水はけが良くて健康地であるということで、この地が好まれていくことになります。

## 箕面有馬電気軌道と住宅地開発

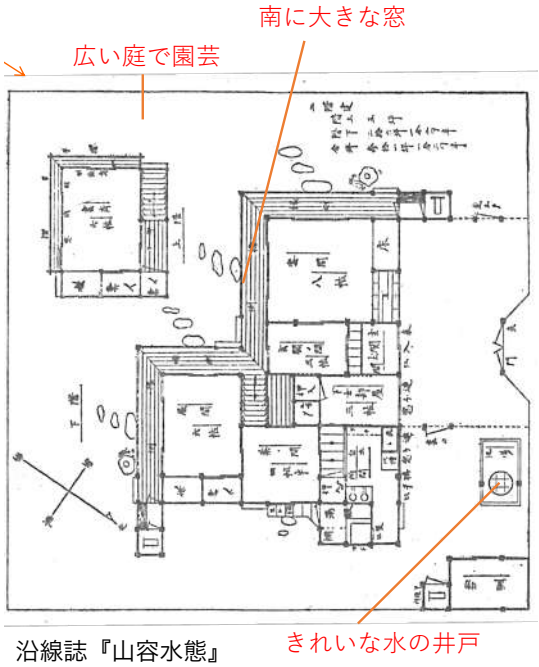
郊外開発でとりわけ重視されるのが、阪急電鉄の開発です。当初は、箕面有馬電気軌道という名前でした。宝塚歌劇を主導したことでも知られる小林一三が、まずは箕面線と宝塚線を開通させる。普通は、神戸や大阪といった大都市間を結ぶので鉄道は採算が取れるんですけれど、これだと採算が取れないだろうとバカにされる。しかし、小林一三はよく考えてまして、ここにまず観光地を開発して人を呼ぶ。それから、沿線の土地は、あまり開発が進んでいないのですが、ここも水はけがよくて高い土地なんですね。そこに住宅地開発をしていけばいいじゃないかとなる。すでに阪神や南海の沿線にも住宅地開発が始まってますけれども、この辺りというのは非常に水がきれいで美味しい。それを売りに開発をしていく。

しかも、あらかじめ土地を安く買っておいたので、会社としても利益が上がりますよということを宣伝していく。こちらが箕面有馬電気軌道が配布したパンフレットですが、住宅を買いたい人たちには、「如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋に住むべきか」、健康地に住んで健康的な住宅に住みましょうというもの。こちらは「最も有望なる電車」と題されていて、あらかじめ土地を買ってあって、絶対に儲けが出る商売をしてますよということです。これは田園都市とは違って、いかにも資本主義的ですが、郊外の住みやすさだとか、健康な居住だとか、新しい時代の住まい方を提案しています。



『阪神急行電鉄二十五年史』より

建設された住宅を見てみます。これは池田の新市街でちょっと川っぺりなので、池田の中では低い方なんですけど、全体の流域からすれば、少し高いところにある駅前です。ここ（配置図左上）は２階だから、南側は庭なんですね。広い庭で園芸ができる。この庭をL字に囲んだ縁に、開口を大きく取って日当たりが非常に良い。まだ当時は水道が通ってないので、きれいな水の井戸がここにある。こういう正方形に近い敷地で、大阪のウナギの寝床みたいな町屋の暗い室内じゃなくて、明るい室内で健康的な生活ができますよということを謳っていくわけです。



沿線誌『山容水態』
に掲載されている池田室町の住宅の間取り

## 郊外開発に娯楽施設が果たす役割

宝塚新温泉パラダイス　明治45年

宝塚新温泉パラダイス

それから、郊外開発では娯楽だとか観光も大事で、宝塚にはこういった温泉場をつくっていく。その隣に建てた新温泉パラダイスで公演され始めたのが宝塚少女歌劇です。なぜ少女歌劇なのか。当時の娯楽は、芸者さんだとか、そういった人たちを呼んで男の人たちが遊ぶというのが割と主要な郊外での娯楽だったんですけど、これからはそうじゃないよと。家族連れが来て、女性や子供も一緒に楽しむことができる健全な娯楽をやっていかなきゃいけないということで、少女というのは多分、芸者さんという大人の女性の艶やかさに対する清新な、あるいは清純なイメージをつくるシンボルだったんじゃないかと。

宝塚新温泉　昭和初期

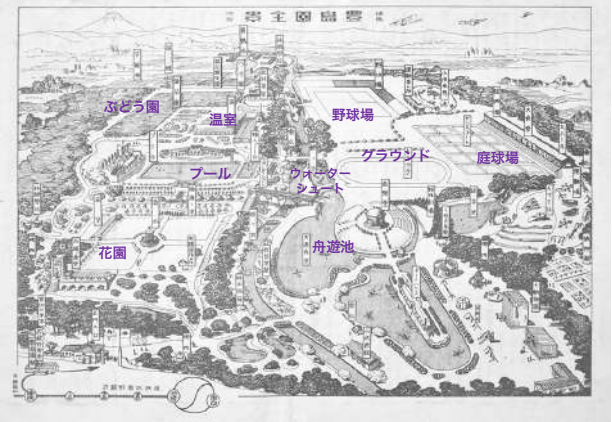
この少女歌劇が、大正３年に初公演し、大正６年ぐらいから当たるようになった。これを中心に据えていくために宝塚大劇場をつくり、多くの人に健全な娯楽を安く提供していくことをコンセプトに宝塚新温泉という遊園地が、日本を代表するような健全な遊園地に発達していくことになります。

宝塚大劇場

## 宝塚から豊島園・多摩川原京王閣遊園へ

これを全国の遊園地や鉄道会社が真似していくわけですね。東京でも郊外住宅地化の動きが広がっていって、田園調布も阪急の小林一三に教えを請いながらつくられました。実際には、渋沢秀雄さんが主導していくんですが、彼が小林一三の宝塚を見に行って、この隣の駅の前に多摩川園という遊園地をつくるのもその流れです。

図版：『夢の黄金郷「遊園地」～思い出のメリーゴーランド～』より



昭和初期頃の豊島園

豊島園も、当時の遊園地だとか郊外の娯楽のあり方をよく示していて、阪神電車の沿線誌でも、「園芸」と「体育」と「歴史の発見」の３つが郊外の楽しみとして大事だと喧伝するんです。それで豊島園の絵図ですが、これは練馬城址、城跡なんですね。ここは園芸でしょ、スポーツ施設でしょ。そういったものが揃っている。今の遊園地からすると全然イメージが違うんですけれど、これが当時の遊園地

の、郊外の健全な娯楽のイメージなわけですね。これが昭和になるとこんなふうに発展してしていく。大宮公園も、大体こんな感じになるんですよね。

これは多摩川原京王閣という多摩川原の駅（現在は京王多摩川駅）の前の遊園地、今は競輪場がありますけれども、それができる前は宝塚を真似た、宝塚を相当に意識してつくられた遊園地だったんですね。これも立地が大事で、多摩川べりに出来ています。遊園地の中で遊ぶだけじゃなく、水辺などの環境の良さが、娯楽施設の立地にも、当時はよく関係していたということです。

## 大正初期における住宅地としての鹿島台に対する眼差し

じゃあ浦和や大宮はどうなのか。ちょうど宝塚が少女歌劇を始める頃、浦和も住宅地として注目されるようになります。

大正５年３月の国民新聞の記事では、どこが郊外住宅地として相応しいのかということで、東京への近さ、教育環境の良さ、それから下水道整備による清潔さから、鹿島台が出てくる。最初に注目されるのが鹿島台。鹿島台というのは、今日、（まちあるき参加の）皆さんが歩いてきた辺りのことなんですけれど、ここ埼玉会館から見て西側の高台ですね。別所沼と県庁の間の平らな高台を鹿島台といいます。この場所が住宅地として、この頃から注目される。富士山が見えるとか風光明媚とか、とにかく10万坪のこの地は最も有望視されている。

そこはやはり土地が高くて適度に乾燥しているけど、そんなに登るのに大変じゃない。しかも平ら。今ほど平らだったかわかりませんけど、向こう側に沼があって、風光明媚で空気もいい。少し行くと、牧場もありましたね。そういった場所が注目されるのは、高燥の地という概念からするとよくわかる。健康地、地盤堅牢、洪水がないというのが重要ですね。それから水も大事で、浦和と大宮はいい地下水が当時からある。それも注目される重要な要素だったんじゃないかと思います。それから大躑躅園（つつじ園）があり、遊覧地としてもいい。別所沼の周囲に数百の桜の木を植えるとか、公園的設備をなしているとか、ちょっと遠いですけども田島ヶ原のサクラソウとか。こういうふうに住宅地や別荘地としての資質が注目されています。この地が住宅地化していく上で非常に重要な観点かなと思います。

大正3年

昭和2年

（左図）ここが県庁でこの辺が埼玉会館、これが中山道で、鹿島台はこの辺りですね。これ（右図）はもうちょっと先に進んだ時代のものですけれども、駅からの距離もちょうどいいし、旧市街と新しい市街とそれに接する住宅地がここにできれば、都市的な要素もあり田舎の良さもあり、非常にコンパクトで住み心地のいい条件が、ハワードが求めていたような環境がこの時代の浦和に

別所沼

角倉牧場（大宮南部）　『埼玉県写真帖』　昭和９年より

土合村桜草自生地　『埼玉県写真帖』　昭和９年より

はずいぶん整っていたと見なせるんですね。

別所沼には、この後お話しいただく立原道造がひとり住まいの場所としてヒアシンスハウスを考えていました。別所沼は行楽の地になることを見越して周辺を整備して、観光客だとか散策する人たちにとっていい場所にしていきましょうといった動きも、昭和２年頃に出てくる。昭和園という利益目的の遊園地みたいになる時代もございました。

町営住宅も、鹿島台やその周辺につくられています。

## 住宅地開発に援用された耕地整理法

郊外住宅地としての浦和の街並みがつくられていったのは、耕地整理によると言っても過言ではないんですが、これはもとは明治32年の耕地整理法によりできるわけです。こんなふうに農地を整然とさせて、収穫をしやすいように、農作業しやすいように整備していこうという目的を持った法律だったんです。

こういった土地を整えるための法律、法制度というのはしばらくなくて、都市計画法が1919年（大正８年）にでき、そこにぶら下がる土地区画整理法が定められるのですが、それが具体的なところまで詰められて使えるようになるまで時間がかかるんですね。それまでの間は特に、この耕地整理法が住宅地開発にも使われていくんです。

最初は大阪の南の方、今宮の辺りで使われて。別府の街も、大々的に耕地整理法を使って街づくりを始めたり、これを使っているところは方々にあります。名古屋も結構大きな面積をやっていますし、世田谷区の辺りでは、玉川全円耕地整理という大規模な事業が行われています。浦和大宮地区でも住宅地化を目的として、この耕地整理が行われました。

耕地整理では、地主の人たちが組合をつくって、土地を出し合って分筆や道を整然とさせる事業を共同で行います。道路に充てる土地、工費をつくるための土地を供出したり、お金を借りるなどして遣り繰りするのですが、話し合いでお互いの損得に差が出ないようにします。本来は農地の整理をするための制度ですが、浦和耕地整理の事業完成記念帳には「住宅地トシテ最モ適セルヲ以テ」と、住宅地目的とはっきりと書いてあるわけですね。

大宮の耕地整理についても、昭和７年の新聞記事に、「住宅地として解放することになった」とあります。この記事にはさらに、省線電車、現在の京浜東北線になるものが出来て、それで人がたくさん来るとか、それから大埼玉市構想という議論が昭和７年あたりから出てくるんですけど、それとも関係していると書いてあります。

浦和市史より

## 浦和と大宮の耕地整理

耕地整理は、地主等が主体となり組合を設立し、設計して施工して、換地処分と話し合いもある程度終わったところで、確定図を描いて、その認可を受け、事後処理などを終わらせてから組合解散。こういった動きになるんですね。

この換地処分の時につくる確定図は、どんなふうに町割りをしていったのかということがわかる史料なんです。浦和耕地整理組合については、市史に載っているこの確定図が知られているんですけれど、この原図が埼玉県の文書館にありまして、その様子はさらに具体的にわかるわけです。

この他にも、別の組合の確定図がたくさんあって、領家や駒場の辺りもやってるということがわかる。駒場はここで、北浦和はここですね。大宮の確定図は見当たらなかったんですけれども、こういった大宮全図という耕地整理後の道路割りを示した地図をまとめた冊子がつくられてまして、これが大宮の博物館に所蔵されています。これを見ると氷川参道の東側と高鼻のあたりが耕地整理の対象になっているということがわかります。耕地整理では、途中からいろいろ変更になるところもあって、浦和の確定図にはここの17号国道が後からこういうふうに描き換わっているので、経過も多少読み取ることができます。

浦和や大宮の周辺には、当時につくられた耕地整理組合がたくさんあって、文書館の中で見た限りだと、書類や確定図がこれだけ見つかりました。これらの確定図から読み取って、どこが耕地整理で整備されたのかを地図に示すとこうなります。与野の辺りは確定図がなかったんだけれど、市史には載っていて、その記述、文章から見ると、このようになっていて、おそらく与野も結構大きくやっていたであろうということです。

浦和はここで、それ以外のところ、大宮、日進から南浦和の辺りまで、大々的に耕地整理が行われていたことがわかります。最初の頃は、大きな面積の組合で行われ、北浦和の辺りだと

戦前における浦和・大宮地区 の 宅地開発目的とみられる　耕地整理組合 一覧

| | 組合名 | 組合長 | 設立認可 | 換地処分の認可を受けた日 | 組合解散 | 図面史料 所蔵 | 図面史料 縮尺 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 浦和 | 小谷野伝蔵 | T11. 9. 16 | S8. 12. 23 | S14. 8. 26 | 文/2枚 | 1／1200 |
| 2 | 大宮 | 橋本長三郎 | T14. 3. 23 | S9. 3. 13 | S18. 10. 26 | 博/7枚＊ | 1／2400 |
| 3 | 三橋 | 川合礼吉 | S2. 5. 30 | S19. 9. 8 | | 文/4枚 | 1／1800 |
| 4 | 与野 | 井原儀助 | S4. 2. 28 | S12. 5. 7 | | 無 | |
| 5 | 日進 | 渋谷慶助 | S5. 5. 16 | | | 文/3枚(1, 4区のみ) | 1／600 |
| 6 | 土合村（西浦） | 石川猛 | S5. 11. 10 | | | 文/5枚＊＊<br>文/1枚（2区のみ） | 1／1200<br>1／600 |
| 7 | 谷田村 | | S6. 2. 25 | S19. 9. 8 | | 無 | |
| 8 | 六辻村 | 細渕寅象 | S8. 9. 6 | 別所区 S13. 4. 19 | | 文/1枚 | 1／600 |
| 9 | | | | 白幡区 S14. 2. 7 | | 文/1枚 | 1／1200 |
| 10 | | | | 文蔵区 S18. 9. 22 | | 無 | |
| 11 | | | | 根岸区 S17. 6. 30 | | 文/3枚 | 1／1200<br>1／600 |
| 12 | | | | 辻区　S19. 7. 18 | | 文/1枚 | 1／1200 |
| 13 | 浦和本太 | 石井萬右ェ門 | S8. 9. 8 | | | 文/1枚 | 1／1200 |
| 14 | 向原 | 石川治良吉 | S8. 12. 23 | S11. 12. 23 | | 文/1枚 | 1／600 |
| 15 | 大谷場 | | S8. 12. 26 | S15. 11. 8 | S17. 1. 25 | 無 | |
| 16 | 針ヶ谷 | 小宮金吉 | S9. 1. 10 | S12. 11. 16 | | 文/2枚 | 1／600 |
| 17 | 領家駒場 | 星野重治 | S9. 1. 15 | | S20. 2. 10 | 文/1枚＊＊<br>文/1枚 | 1／3000<br>1／1200 |
| 18 | 原山 | 長谷川清左給門 | S9. 1. 16 | S17. 6. 15 | S13. 5. 9 | 無 | |
| 19 | 大宮南部 | | S9. 8. 14 | | S15. 5. 8 | 無 | |
| 20 | 芝村第一 | | S9. 10. 12 | S12. 5. 7 | | 無 | |

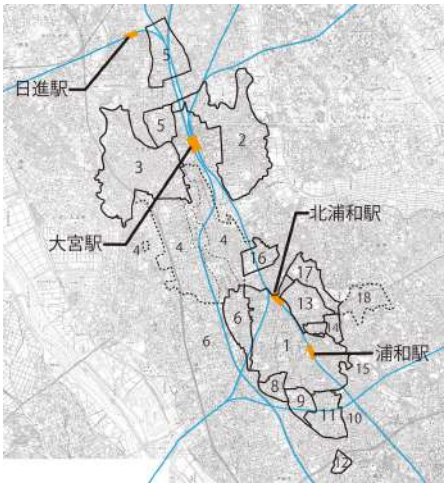
○組合名等の情報は『県報』『浦和市史』『大宮市史』『与野市史』『三橋村誌』等を参照した。
○土合村の組合は昭和8年、西浦耕地整理組合に名称変更し、区域を3 区に分けた。

○「所蔵」列の凡例

＊『耕地整理完成記念大宮全図地番地積入』に掲載の当該区の図面
＊＊ 現形並予定図ほか
注記の無い場合は確定図の原図

文 ：埼玉県立文書館、
博 ：さいたま市立博物館、
図 ：埼玉県立熊谷図書館

このほか、大宮北、大宮別所の書類と確定図が確認されたが、道路割りや分筆の形状から、低地を中心にした農地の改良を主目的とした事業と判断し、一覧から除いた。



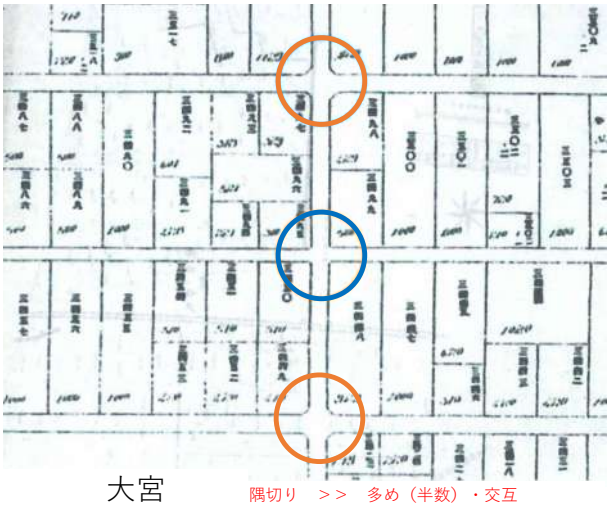

確定図等から読み取れる
各組合による事業の施工範囲

図註：
○ 国土地理院発行2.5万分1地形図を加工。
○ 鉄道路線は現状を反映。
○ 1などに見られる域内の非当該区は示していない。
○ 4の破線は与野市史に示される「耕地整理住宅地」の範囲。中央の低地、西の飛び地周辺も施工範囲だった可能性がある。
○ 5は、1区（南）と4区（北）。2区、3区 は不明。
○ 6は、2区の範囲のみ。第1区（当時の土合村域内）と第3区（当時の与野町南部）は正確な位置が不明。
○ 7の位置は不明。
○ 10、15は地名から推定される凡その位置のみを示した。
○ 16の針ヶ谷の南も同様に開発されており、同2区だったと見られる。
○ 18の破線は当時の地図から範囲を推定。
○ 19、20の位置は不明。

か浦和の南の方だとか、後からこまごまと組合がつくられていったということです。
　大正５年の文献を見返すと、ここも住宅地、別荘地として適当な場所ですよって浦和町周辺の村の名前が挙がっていることが確認されます。

## 確定図から見える町割り

『大宮耕地整理竣工記念大宮全図』昭和９年より



大宮　　隅切り　>>　多め（半数）・交互

　町割りにどんな特徴があったのかというと、浦和は、道路のコーナーを車が曲がりやすいように切る「隅切り」がほとんどないんですね。大宮はこんなふうに隅切りが、広い道が交わるところにはあって狭い道のところはないというふうに交互になっている。大宮の方が計画的に行われているかなと。私はこういった町割りのところに実際住んでいたのですが、思い返せばそうだった。
　浦和の場合は細い道と太い道が交互になるんですけれども、隅切りがない。それでこの細い道は、1.4間だから、結構狭い道です。実際、街に出てみると、（下の写真）浦和の鹿島台の辺りですけれど、隅切りがないところが多い。細い道はだんだん拡幅されて無くなってきてますけど、これが1.4間の道幅が残っているところです。車両を通すには大変なんで、防災上よくないですけれど、落ち着いた感じで、人しか入って来ないですから、居心地はいいなと思ったりもします。そういう意図でつくられたのかはよくわからないです。
　後発の耕地整理の道路割りを見ると、割と広い道が増えてくるんですね。それから隅切りも多くなってくる。道路も密に入ってくるということで、住宅地を意識しているところが多い。これは本太あたりで、広めの道と隅切りが取られているところが多いです。これは針ヶ谷のあたりで、ロットが大きいんですけれど、隅切りはほとんど全部に取られている。領家の場合は、大きな道がズドーンと真ん中に通っている。この町割りの仕方が組合

鹿島台附近　の　隅切りの無い交差点

鹿島台附近　の　隅切りの無い交差点　正面に別所沼の木立

鹿島台附近　の　1.4間幅　道路

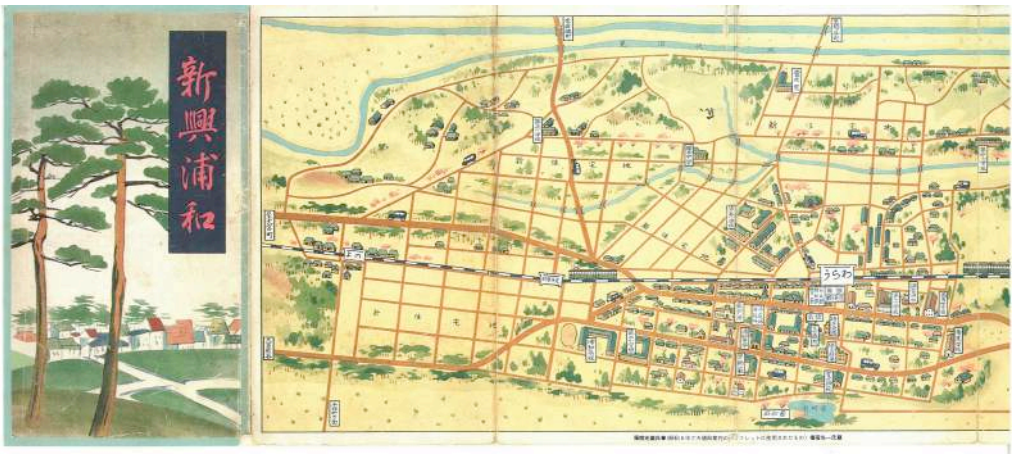
鹿島台付近

元町附近（本太）の　隅切り

領家附近（領家駒場）の　広い通り

によって少しずつ違っているところは面白い。（前頁下の写真）元町にはゆったりとした道路があって、領家には、歩道までついている道まであってという感じです。

昭和８年に、この北浦和駅附近を中心に住宅地として新しい街が出来上がってきてますよって宣伝する「新興浦和」というパンフレットも出来ております。昭和11年ごろの地図を見ても、それを反映した町割りの様子がよくわかります。




「新興浦和」　昭和８年頃の浦和案内のパンフレットに使用されたもの

## 一方、農地はどこへ

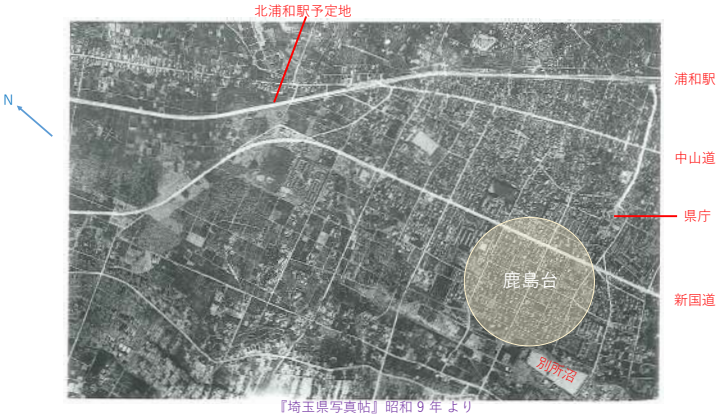
耕地整理をすると、地主は道路に充てる土地を供出します。そして宅地向けの整理の度合いが高いと道路が密になるので、農地としての使い勝手は悪くなるんですね。土地区画整理は宅地用が前提なので、耕地整理にしておいた方が農業と両立できるということから、耕地整理が好まれたという側面もあるんです。三橋だとか西浦の耕地整理だと、明らかに農地として区画されているところもあったりしますし、三橋では、農地として使っていきたい人たちと住宅地として開発していきたい人たちとで揉めたそうです。三橋村史という書物にも、住宅地として開発することで始まったんだけれど、目的は農地開発だと、非常に曖昧な書き方をされているので、そういった軋轢が反映されているのかなと思いますね。

## 絵描き村と言われた鹿島台と奥瀬英三邸

次は、実際にそこに家がどれくらい建っていったのかということですが、やっぱり鹿島台のあたりに最初に家が建て込んでいくので、ここが好まれたというのが、この写真からもよくわかります。

大宮は、この地図の色分けがどこまで信憑性があるかわからないんですけれども、氷川参道の辺りは比較的に住宅地化が進んでいったのかなと思います。

写真を見ると、常磐町の辺りと仲町の辺りの当時の風景は、自然が豊かなところもありながら、市街地化が進捗しつつあり、この頃引っ越してきた人にとって非常にあ




『埼玉県写真帖』昭和９年より

大宮町全図　昭和7年8月の一部　（『大宮町勢要覧』昭和９年より）

りがたい、住みやすい環境に見える。今も鹿島台辺りに行くと、戦前に建ったと思われる住宅が散見されますので、かつての環境を想像できる要素はまだまだあるんじゃないかと思われます。

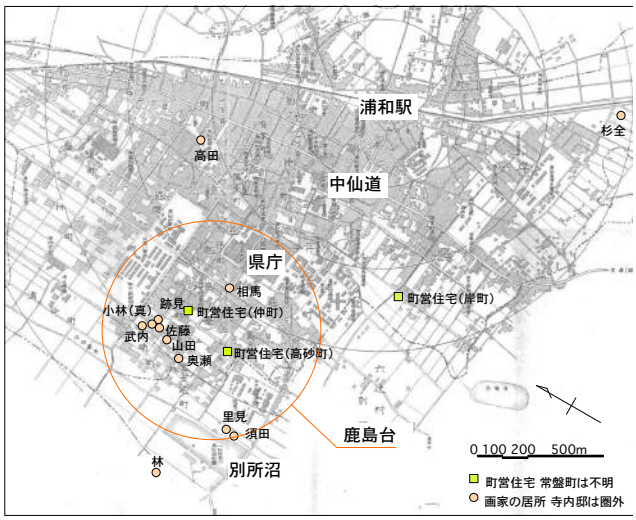
鹿島台付近

埼玉会館
『埼玉県写真帖』
昭和9年

岡田信一郎設計

大正15年
「設立」

　あとはこんなふうに住宅以外にも学校、健康相談所、県庁があって、埼玉会館はこんなのが建っていました。これは岡田信一郎という建築家が設計していて、浦和の画家さんも描いています。




昭和初期の鹿島台（町営住宅の位置と画家の居所）

　（昭和６年の東京日日新聞に）「四十有余名のアーティストが絵描き村を形成している。」と書かれています。鹿島台だけにそれだけ集まって、絵描き村と言われていました。画家さんが、どんな理由でここに越してきたのかを一覧にしてもらったものです。震災の後だとか、浦和の田園風景に憧れただとか、親戚の勧めだとかいろいろあるんですけども、画家たちの住まいの場所をプロットしたこの図を見ると、この辺に集まっているのがわかります。

　ここに越してきた奥瀬英三という画家さんがいまして、ちょっと前までアトリエ付き住宅が残っておりました。この住宅は富永襄吉（とみながじょうきち）という、アメリカのマッキム・ミード＆ホワイトという建築事務所にいた人が、震災を機に帰ってきて、何かの拍子に奥瀬さんと出会って住宅を建てるということになったんです。材料は節約してるんですけれども空間的に豊かなところがあって、ずっと持ち主の方も残されてきたわけです。どうにか解体寸前に市の指定文化財になりまして、再築を待っているという状況です。

　これはなんで重要かというと、浦和と大宮の郊外化の端緒がこの鹿島台なんですね。その鹿島台が画家さんたちに好まれ、ここに居住地を求める芸術家が多く集まりました。そうした歴史が文教都市浦和を構成する要素になっているわけです。この地の郊外住宅地化を物語る住宅なわけですね。それから奥瀬さん自身が竣工時の室内を描いていて、アトリエは和洋折衷のインテリアです。ここは農家っぽく大きな梁や大黒柱っぽいものがあって、ちょっと床が下がっています。どうも奥瀬さんは農家に、当時強く惹かれていた様子が読み取れるんですね。家をつくる少し前の文章に、「梁の太いガツシリとした小細工の

ない木組、分厚い壁、幾代かの土地に住みついてゐ安定の感じの強くうたれる。」とか「農家が、文化住宅以後、當然生れ來るべき新伝統主義の住宅建築に」なるだろうと書いてあって、それが反映されていると思われます。

これが竣工前に富永襄吉から届いてるはがきなんですけれど、このスケッチと同じインテリアが残っていました。この形が当初からあったことになりますが、これ、どうも朝鮮じゃないかと。奥瀬さんは朝鮮半島にちょっと前に行ってるんですね。向こうの建物に随分と感情移入した文章が書かれているので、アジアへの親近感というものがこの空間に反映されている。奥瀬さんは、異なる文化が融合されて新しい伝統がつくられていくというようなことも話しているので、そういった彼の考え自体もこの住宅に反映されている、という意味でも重要な建物ということです。

奥瀬英三『室内』昭和6年
戦前の印刷物（書誌情報不明）より。
幾分退色しているが、建設当時の様子が良く分かる。

大宮公園（氷川公園）の開園、拡張、改修

| 年 | 出来事 |
|---|---|
| 明治 4（1871） | 社領地が政府の土地となる。 |
| 明治 6（1873）. 1.15 | 明治政府が名所、旧跡地などを公園の候補地に選定するよう命じる。 |
| 明治13（1880）. 4 | 県知事が氷川の奥山で梅を培殖。（公園ではないが偕楽園的） |
| 明治16（1883） | 上野一熊谷　鉄道敷設 |
| 明治17（1884）. 3 | 公園及び維持方の儀に付奉願上候という請願書が出される。 |
| 明治17（1884）.12 | 庭園師 佐々木可村を呼びマスタープランの作成に入る。 |
| 明治18（1885）. 3 | 大宮駅　開業 |
| 明治18（1885）. 4 | 含翠亭（二階建休憩所）、東屋、ベンチ等の設置で公園らしくなる。 |
| 明治18（1885）. 9.22 | 氷川公園　開園 |
| 明治21（1888） | ため池（官有の飛地）を公園に編入。 |
| 明治24（1891）. 9 | 公園が大宮町の管理となる。 |
| 明治31（1898） | 道路敷地を公園に編入。 |
| 明治31（1898）. 4 | 管理が大宮町から埼玉県に移り県立公園となる。 |
| 明治45（1912） | 氷川公園の拡張予算案が可決される。 |
| 大正 9（1920）.11.23 | 本多静六による公園調査が開始される。 |
| 大正10（1921）. 5.27 | 本多静六・田村剛による「埼玉県氷川公園改良計画」 |
| 大正12（1923）. 9.1 | 関東大震災によって資金調達が困難になる。 |
| 大正13（1924）.12.9 | 氷川公園改良及び大運動場建設を再開したい旨の文書が提出される。 |
| 昭和 8（1933）. 7 | 児童遊園完成 |
| 昭和 9（1934）.11.29 | 野球場　完成 |
| 昭和14（1939） | 双輪場　完成 |
| 昭和15（1940） | 陸上競技場　完成 |

## 大宮公園はまず旅館街に

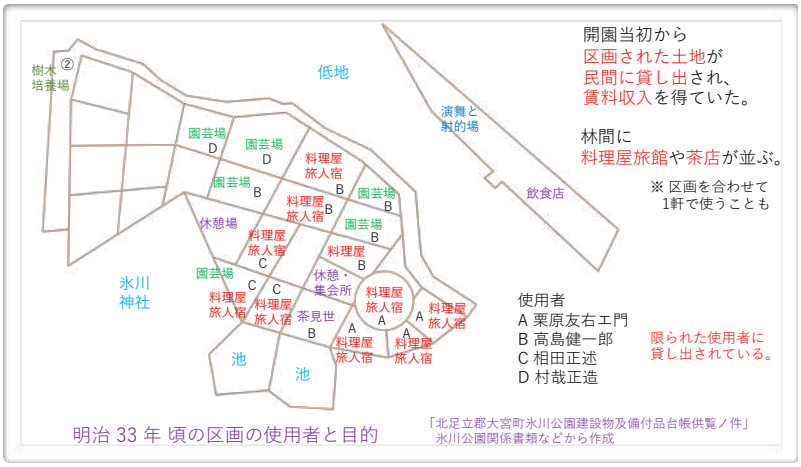
ちょっと時代はさかのぼって、大宮公園ですけれど、ここは行楽地として郊外の環境の良さを訴えていく、あるいは知っていく、それに親しんでいく場所として重要で、これが大宮浦和地区を田園都市らしく、田園郊外らしくしている要素なのではと考えたわけです。やってくる人たちが、いわゆる家族連れの人たちになるので、彼らに見合った形に変わっていくんです。

大宮公園ができるきっかけは、氷川神社の後ろにある奥山の整備です。なんで整備するのかというと、鉄道が通るんだけれど大宮に駅が出来ないんですね。大宮駅をつくるためには、氷川神社が観光地化しなきゃいけない。ここ（明治18年３月）で大宮駅開業ですけれども、その前にマスタープランを作成していて、氷川公園として開園するのが明治18年（９月）です。

大正になって、埼玉県久喜出身の、当時、造園では第一人者の本多静六に計画を依頼する。大正10年に、弟子の田村剛さんと一緒に「埼玉県氷川公園改良計画」が出され、これに則ってその後の整備が進められていくことになります。オレンジのところがもともとの氷川公園として明治時代にできるところです。後にちょっと買い足したりして、この領域を拡張して、中身のあり方も変えましょうというのがこの計画なんですね。

最初、この氷川神社の北側のボート池の手前辺りがどんな様子だったのか？佐々木可村に依頼してこんな設計図が出来た。最初、佐々木さんはここの樹木を伐採するつもりだったんだけれども、松の固有種があったんだそうで、それを伐るのはちょっとまずいという話が出て、こんな松林を保全する修正案が出てくる。

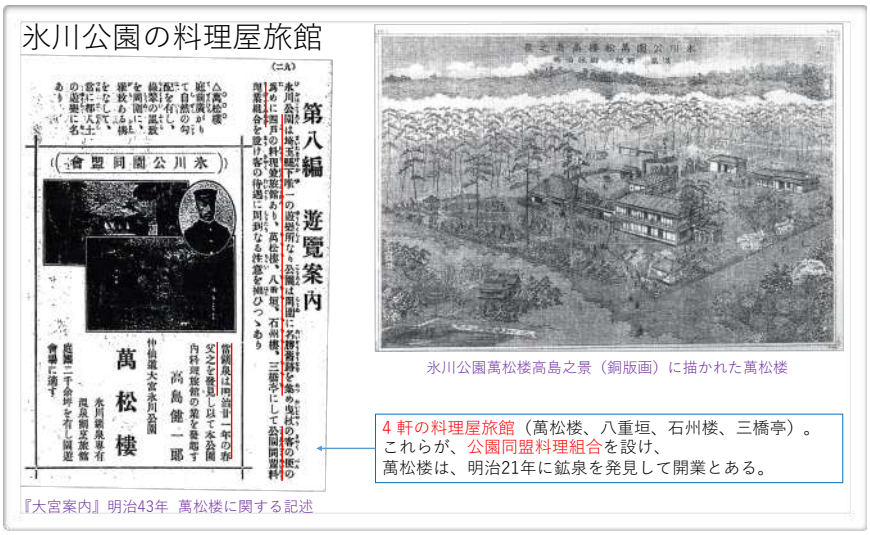
環境の良さを堪能してもらうためなのでしょうが、一方で当時はお金稼ぎをするために土地を貸し出すんですよ。賃料を取って、運営費を賄うんです。これは明治30年代のあたりですけれど、土地を借りて使用する者が非常に限られていた。ここの４人だけでずいぶんとエリアを占めてしまうということです。多分このAの人は、この辺りをまとめて借りている。ここに旅館を建てて、他はそれに供する広場みたいな感じで使っているんだと思いますけれども。他もこんなふうに、お宿だとか料亭だとかいうのがたくさんある。



明治 33 年 頃の区画の使用者と目的
「北足立郡大宮町氷川公園建設物及備付品台帳供覧ノ件」
氷川公園関係書類などから作成

随分と今の公園のイメージとは違う。これは市史に載ってるものですけれど、ここに大きな旅館があったり、公的な含翠園というのもあったりしてます。すぐそばに見沼の蛍の自生地があって観光の名所になっていたことはよく知られていますが、ここの旅館に泊まって蛍を見に船に乗って行ったようです。

萬松楼という料理屋旅館が大宮公園の中にこんなふうに建っていた。この記事を見ると、料理屋旅館の組合をつくっていたようです。

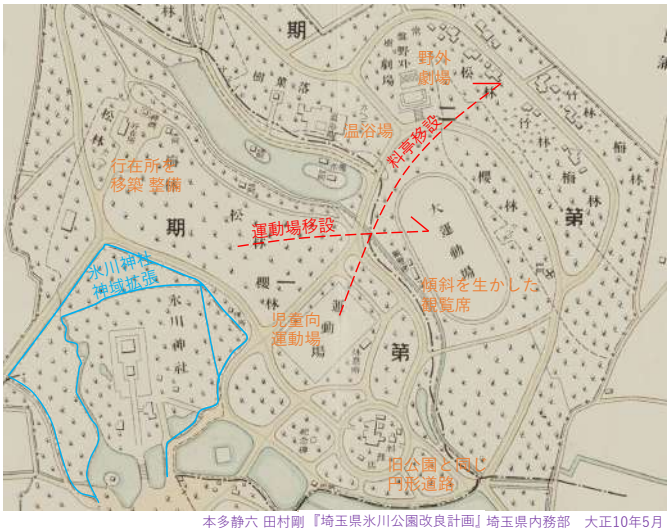


『大宮案内』明治43年 萬松楼に関する記述

## 家族向けの娯楽の場となる大宮公園

明治の末になると、たくさん人が来てちょっと狭すぎるので、これを拡張しましょうという動きが出てくる。それが認められて、大正元年に用地の買収が始まり、本格的に動き出すのはもうちょっと先ですけれども、そこで本多静六さんに設計を依頼する。

この大正元年から９年という間にずいぶんと娯楽のあり方とか世の中が変わっていきます。新しい宝塚もこの間に出来ているわけですね。宝塚も当時は向かい側に花街があって、そこと連携しようとしてたんですけれども、少女歌劇が当たったので、方向性を健全・清新志向に切り替えていく。



本多静六 田村剛『埼玉県氷川公園改良計画』埼玉県内務部　大正10年5月

当時は全般に、「これからの娯楽」は家族向け、健全な娯楽といった空気があったんじゃないかと思います。それで公園のあり方も変えていこうということだと思うんです。「一家挙げつての小旅行 」これが東京の人たちが重視していると書いている。もちろん県民の遊楽もそうなんですけれど、東京から来る人たちの遊び場、施設としても非常に重要であって、起伏もあって風景も野趣に富んでいて、非常にいい場所なので、模範的な公園となるんじゃないか、というようなことが書いてあるわけです。

本多静六の計画には無かった施設

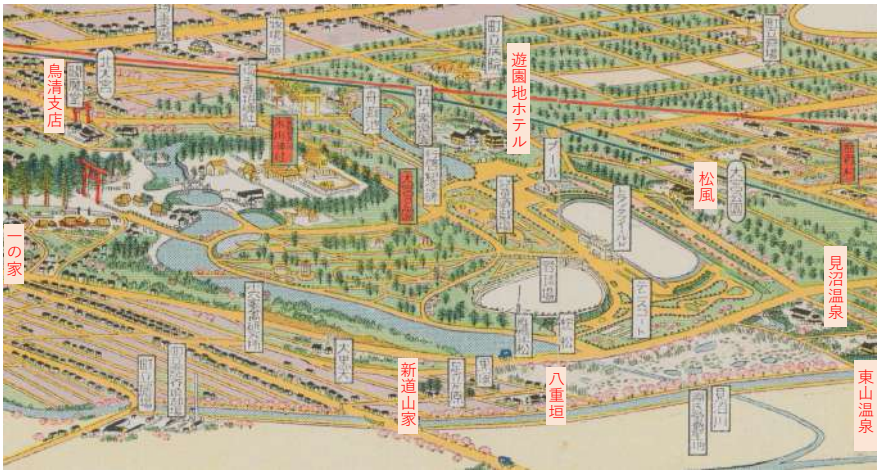
遊園地ホテル（『大宮の昔と今』より）

野球場　『埼玉県写真帖』　昭和9年より

それでこんな計画をして、この辺にあった料理屋旅館はこっちの端に移す。児童遊技場をつくる。ここは低地なので傾斜を利用してスタンドをつくって土地になじませる形で運動場をここにに移す。それから、氷川神社の後ろに森をつくって、神域と距離を取るようにしましょう。こんなことがコンセプトです。氷川公園がこういう感じになって、この頃に盆栽村も出来てくるわけです。

実施の設計は県の人たちがいろいろ考えて、本多静六の計画とはちょっと違ったものになって、ホテルや野球場も新たに加わっています。

「吉田初三郎『大宮』埼玉県大宮保勝会　昭和9年（1934年）」の一部に加筆



昭和9年頃の大宮公園付近　　吉田初三郎『大宮』埼玉県大宮保勝会 昭和9（1934年）

昭和９年の絵図、これが計画段階の発行なので、どこまで当時の様子を的確に表しているかわかりません。陸上競技場はまだ出来ていないので、将来こうなるだろうという予測も多少は入っていたかも。県としては、総合運動施設の建設ということで、遊技場、野球場、庭球場などを整えていくわけなんですね。郊外の楽しみ方として阪神電鉄だとか豊島園で主張されていたことと同じで、運動や健康を重視する時代になったので、真ん中にあった料理屋旅館が外に出され、こういう公園に変貌していった。

『大宮町勢要覧』昭和９年　に掲載の広告

この昭和９年の冊子を見ると、大宮公園の中にも、端の方には遊園地ホテルが出来てるんですね。料理屋旅館もあるんですよ、大宮公園「松風」。チ

『大宮町勢要覧』昭和９年　に掲載の広告

ラシの地図にも「松風」がある。見沼河畔の料理屋旅館は公園内にあったものが移っていくのか、新たに出来たのか、ちょっとわかりません。私は子供の頃はこの辺りに住んでたんですけれど、当時はこの三つ（八重垣、新道山家、東山）はありましたね。清水園は参道の脇に今もあります。だからこういった料理屋旅館は公園の周囲に立地するようになって、公園の中は健全なスポーツ中心の、あるいは子供が来てもそんなに問題ないような場所に変わっていったということです。

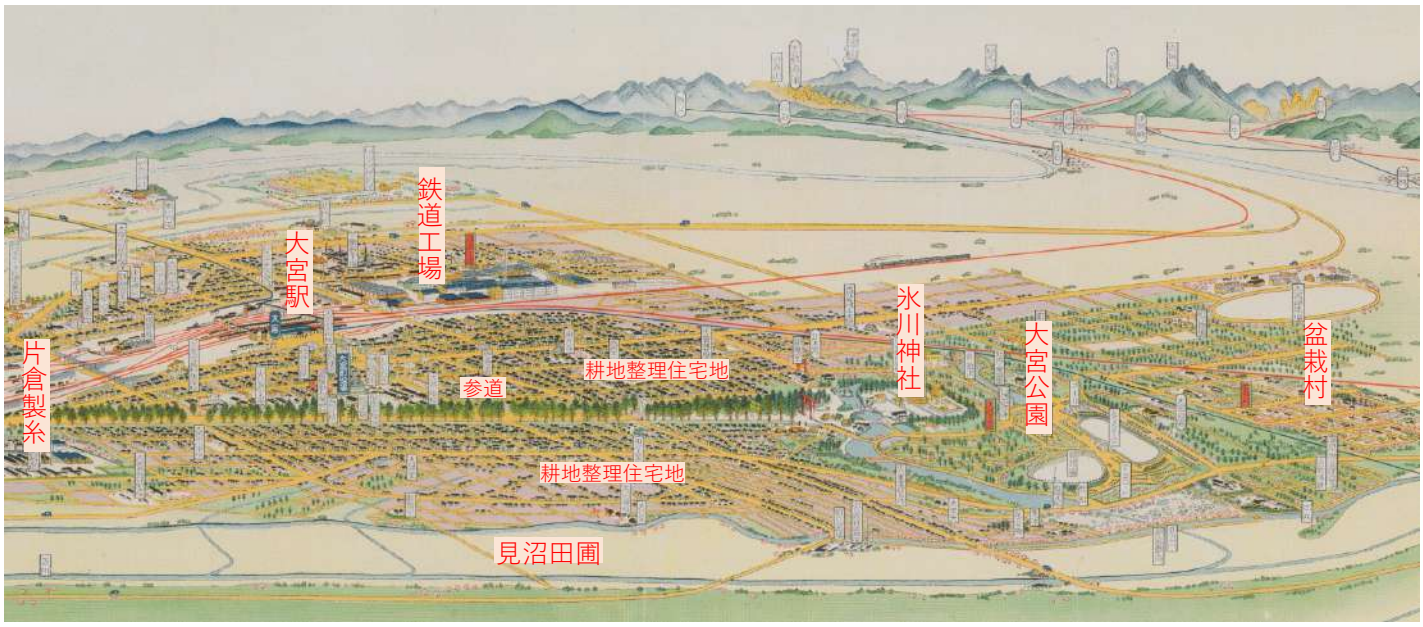
## 田園都市として居住環境がいい大宮、浦和に

この美しい絵図は、吉田初三郎さんが描いたものなんですけど。盆栽村や大宮公園があって、耕地整理の住宅地、グリーンベルトみたいな氷川参道、鉄道と職場としての工場、商店街もこの辺にあって、田園都市の形というのが、それなりにしっかりとある。このままあんまり開発が進んでいかなければ、非常にいい居住環境だったのではと思われます。

浦和も大宮も、台地で高燥の地なので「高いこと」それ自体が重要なんですけれども、見沼があったりして周りが低くて、都市のエッジがちゃんとあって、エリアが限られているというところがコンパクトで住みやすいという印象を与えていたのではないかと。その当時は、周りに田園地帯がちゃんとある住宅地として成り立っていたので、この頃から戦後しばらくまでは、居住環境としてはかなり理想的だったんじゃないかなって、これを見ると思えてきます。

まだまだ話したいこともあるんですけれども、先生方のお話の終わった後で付け加えられたらなと思います。

「吉田初三郎『大宮』埼玉県大宮保勝会　昭和9年（1934年）」の一部に加筆



吉田初三郎『大宮』埼玉県大宮保勝会 昭和9（1934年）

## 第2部「詩人・立原道造を惹きつけた浦和の魅力」

**津村 泰範 （つむら やすのり）**

修復建築家／長岡造形大学造形学部建築・環境デザイン学科准教授。

東京大学大学院建築学専攻修士課程修了、主に近現代の文化財・歴史的建造物の保存再生工事の設計監理実務を歴任。さいたま市「ヒアシンスハウス」夢の継承事業や、所沢市「トトロのふるさと基金」活動拠点「クロスケの家」の再生整備など、埼玉県内地域有志と協働した活動を展開し、現在も継続。

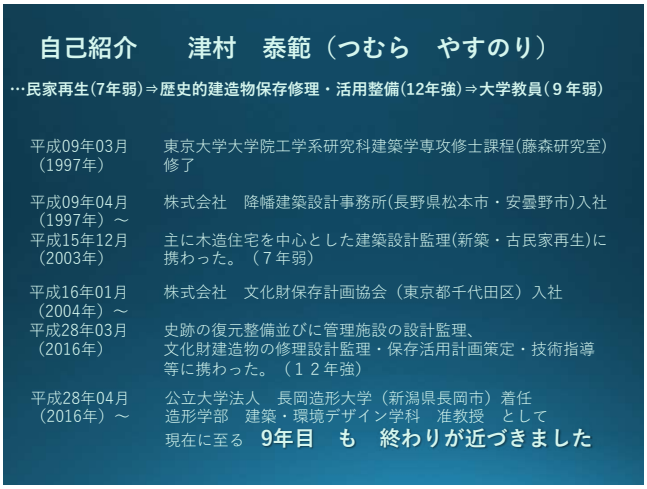
さいたま市(旧大宮市)生まれ、中学・高校とさいたま市(旧浦和市)に通学、現在自宅はさいたま市浦和区。

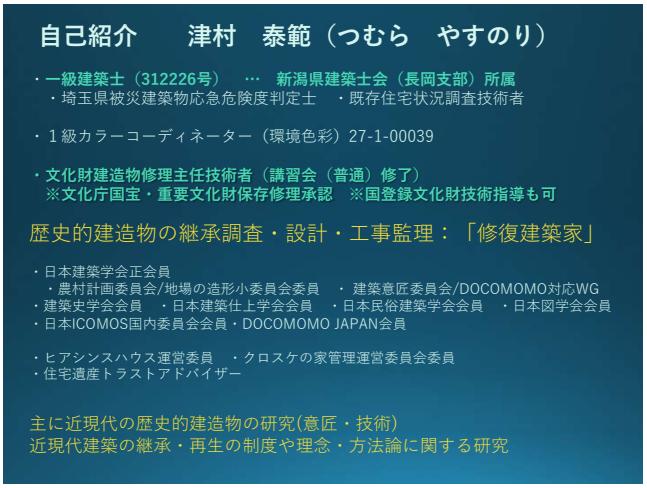
### 自己紹介～修復建築家としての最近の仕事

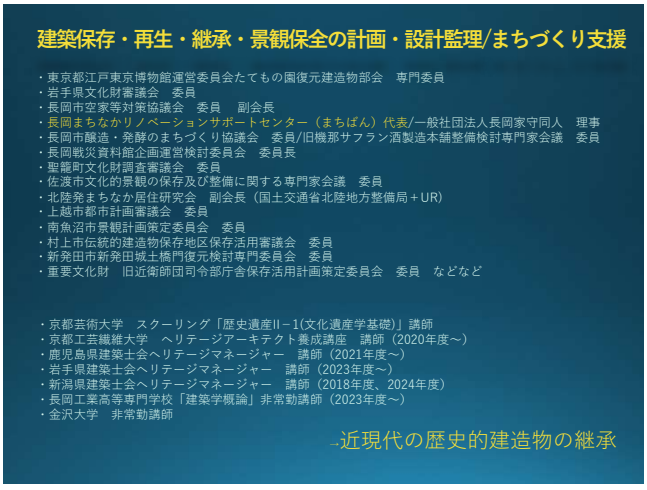
津村：長岡造形大学の津村と申します。僕は、長野県で民家再生を20代でやってまして、その後、文化財保存計画協会という固い名前の会社で歴史的な建造物の保存修理ですとか活用整備とかしていましたが、ちょうど２つの職場の間ぐらいに、ヒアシンスハウスの仕事をさせていただきました。今、長岡造形大学というところで教えて、９年目が終わるという感じですが、この中で特に専門としては、歴史的建造物の継承をする調査だとか設計だとか工事監理が専門ということで、自称、修復建築家と名乗ってやらせていただいてます。

実際には、主に近現代の歴史的建造物の研究とか、近現代の建築の継承、再生の制度、理念、方法論に関する研究など、いろいろさせていただいています。今、長岡では空き家再生だとか、ヘリテージ・マネージャーという古い建物を生かすような建築士の仕事の講師などもさせていただいています。

最近の仕事を紹介します。これ（次頁写真）は群馬県富岡市で、この右の方に製糸場があります。明治、大正、昭和初期に渡って煉瓦造、石造、木造っていうふうにだんだん柔らかいものに構造が変わっていくんですけれども、上州富岡駅の駅前にある「旧富岡倉庫」です。これを活かして地域で使いましょうっていうところ



で、煉瓦蔵は今、群馬県の世界遺産センターが入っています。石蔵は障害者が運営する喫茶店が入っていて、木造棟は地場産のものを売ってます。この向かいに、隈研吾さん設計の富岡市役所がありまして、一体的に隈さんの事務所で設計しています。建築基準法ができる以前の建物をあんまり姿を変えないで現行基準に上手に適合させていくかっていうようなことを僕は得意としてますので、ここも最近、お手伝いをさせていただきました。こんな感じでオープンしています。

## 長岡造形大での活動

長岡は結構雪深いところではあるんですけれど、ここはその隣の燕市の吉田っていうところにある家です。新潟では米をいっぱい作るとすごい地主になれるんですが、そういうような幕末からのすごい大きなおうちで、そろそろ90歳になるおばあちゃんがひとりで暮らしているので大変な登録文化財です。煉瓦造の銀行もあります。これらを重要文化財にした後、今後もうちょっと地域で活用していければなあという考えもあって、いろいろお手伝いしています。

これは長岡市の与板っていうところのお茶蔵をみんなでリノベしましょうみたいなことを頼まれまして、いろんな学生を絡めて、お茶カフェにしました。地域で利用されていますが、ウチのゼミは３～４年の交流会をここでやるのが定番です。

長岡は、空襲で中心市街地が壊滅的にやられてまして、歴史的建造物はほぼないんですね。ただ、比較的（空襲から）逃れた摂田屋地区で、今、観光的にも売り出そうというまちづくりをやってるんです。摂田屋って不思議な地名なんですが、ここには登録有形文化財になってる醸造発酵、味噌ですとか醤油ですとか、お酒の吉乃川さんですとかの建物がいろいろあります。その中で一番不思議な建物、ここにサフラン酒造っていう薬用養命酒みたいなお酒、もう潰れちゃって売ってないんですが、ここを最近長岡市が受け取って、そこを整備しようということで、マルシェをやってみたり、授業の中でいろいろ提案させてもらったりして、今、まちづくりの会社もできて、地域のそれぞれの醸造発酵業の若手の経営者たちと一緒にまちづくりをさせていただいたり、そこに学生を絡めたりしています。

## いかに直さない修復をするか？

このサフラン酒造では、すごいお金かけてこういう鏝絵（こてえ）をつくっちゃってるんですが、これ、プロの左官さんにやってもらわないで隣に住んでいる若い兄ちゃんに「お前、修業してこい」って言って、左官させて、ここしかその人の作品がないというものなんですけれども。僕の師匠の藤森照信さんが、「日本一派手な蔵だ」って言ったところです。この鏝絵の修復を、イタリアからフレスコ画の修復をやっている方を招いて東京文化財研究所さんと一緒に一昨年と昨年やりました。

いかに直さない修復をするか。これはちょうど大正15年の建物なので、ちょうど百年ぐらい経つんですね。これをやった左官さんはちょっと修行して

きて戻ってきてやってるぐらいなんで、まあ若干素人っぽいんですけれど、その素人っぽさを腕のいいプロの左官さんがやったら絶対に塗りかえるに決まってる。そこで、ほぼクリーニングに近いんですけれど、このへたうまさをなんとか残していこうということでやってます。これがちょうど出来上がって、学生と一緒に愛でてるところですね。

　この人はNPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」の渡邉義孝さんという、「ふるカフェ系ハルさんの休日」など結構テレビとかでも出てくる方なんですけれど、彼を呼んで地元の建築家さんたちと一緒に、摂田屋地区のご近所にある、お茶を売ってる茶舗が完全に空き家になってもう数年経つのを、なんとか地域で生かせないかなというようなことをやったりしてるところです。現在進行形です。

## さらに自己紹介【過去の実績】

【文化財保存計画協会での主な担当業務】2004～2016（31～43歳）

・史跡出島和蘭商館跡建造物復元工事実施設計(長崎県長崎市)

・甲府市歴史公園築造工事実施設計監理(山梨県甲府市)

・町田市指定史跡白洲次郎・正子旧宅保存管理計画策定及び屋根修繕監理(東京都町田市)

・軽井沢内歴史的建造物における登録文化財資料作成(長野県軽井沢町)

・東京都近代和風建築総合調査(東京都)

・下関市指定有形文化財　旧逓信省下関郵便局電話課庁舎(下関市役所第一別館)
　保存活用整備計画・設計・工事監理(下関市立近代先人顕彰館「田中絹代ぶんか館」山口県下関市)

・重要文化財三井三池炭鉱旧万田坑施設保存修理調査・設計・工事監理(熊本県荒尾市)

・重要文化財岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館保存修理工事調査・基本設計・保存修理工事監理
　他、登録有形文化財修理の技術指導等

2012年　旧和田家住宅保存活用計画
（トトロの森ふるさと基金「クロスケの家」主屋・茶工場の補強・活用整備）
：個人での業績（共同設計監理：山中知彦・佐野哲史）
※日本建築学会2014年作品選集掲載

## 近代化遺産の「岩手銀行赤レンガ館」に世界が注目

　これは今日お話しする立原道造さんが盛岡に旅行した時（1938年）にすでにあった建物なんですが、東京駅を設計した辰野金吾さんと葛西萬司さんが東京駅と同時にやっていた建物です。これもどういうふうにして地域に開こうかということを考えながらお仕事をさせていただいた「岩手銀行赤レンガ館」という重要文化財建造物で、2016年にオープンしました。ニューヨークタイムズが2023年に、今年行くべきは盛岡だよって、その代表建築として出たので、どうだ！って思ってはいるのですけど、考えることは多かったです。

　ヒアシンスハウスで皆さんと知り合いになったのをきっかけに、「クロスケの家」もお手伝いしました。また『民家再生の実践』という本にも関わりました。

## さらに自己紹介【過去の実績】

【降幡設計事務所での主な担当業務】1997～2003（24～31歳）

・巣山家住宅水廻り再生工事設計監理(登録文化財・長野県塩尻市(旧楢川村))

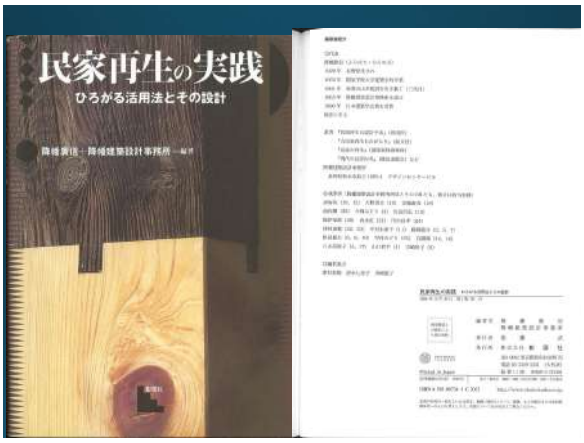
・旧松林家「土壁の家」(稲荷山宿「蔵し館」)再生工事実施設計監理(長野県千曲市(旧更埴市))

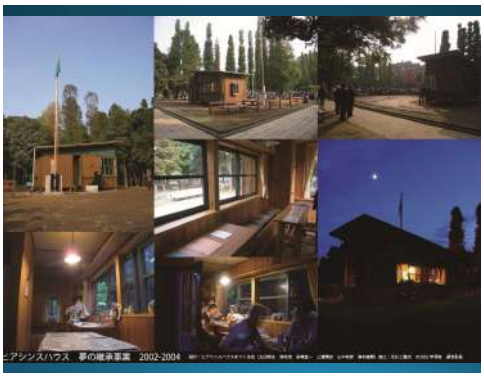
・安曇野高橋節郎記念美術館生家・展示館調査・再生工事設計監理 (登録文化財・長野県安曇野市(旧穂高町))

　他、木造温泉施設や木造住宅の新築・改修設計監理等

・『民家再生の実践』(共著、2006年、彰国社)

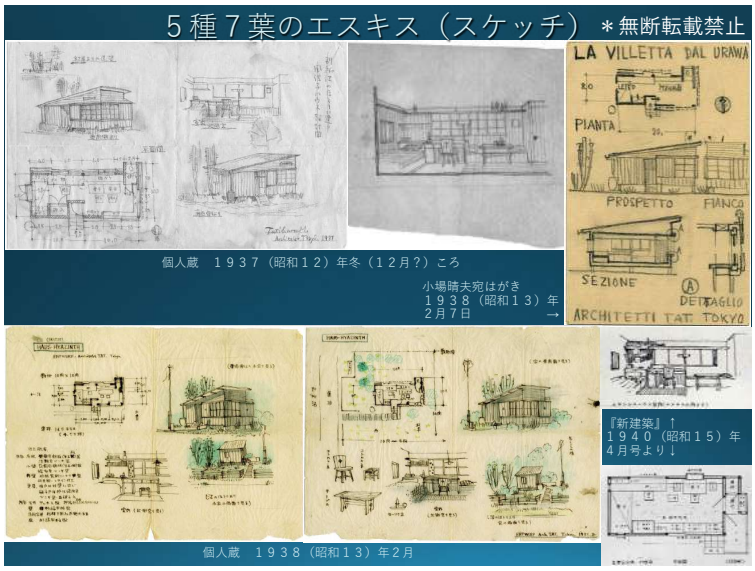
2004年　「ヒアシンスハウス」夢の継承事業の設計・工事監理(さいたま市別所沼公園内)
　　：個人での業績（共同設計監理：ヒアシンスハウスをつくる会）
　　※日本建築学会2007年作品選集掲載、2005年彩の国さいたま景観賞



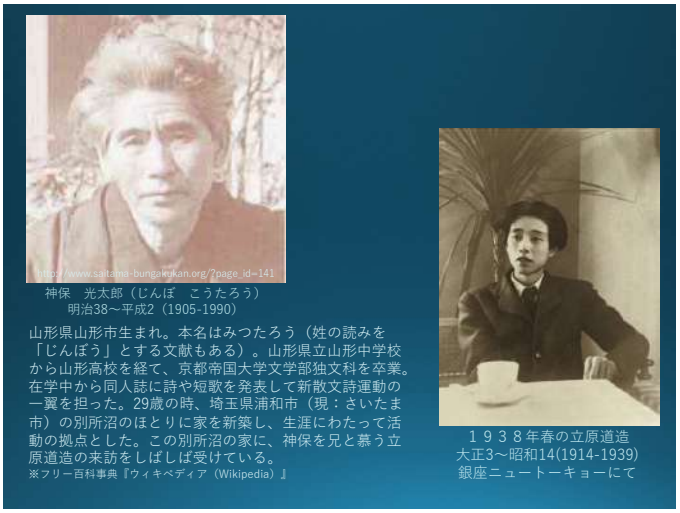


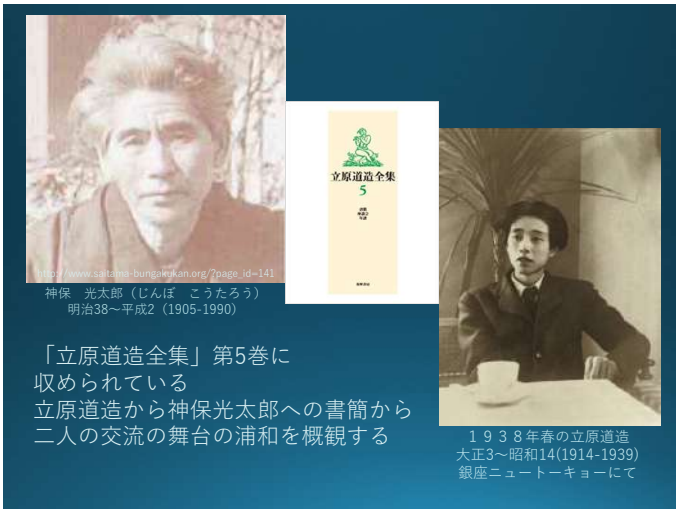
## 「夢の継承事業」で出来たヒアシンスハウス

ここから本題に入ります。今日、「まちあるき」をしてこられた方はここ別所沼からスタートだったかと思いますが、2004年、今年2025年になりましたので21年前になりますけれども、ヒアシンスハウスを別所沼のほとりに、再現というわけではなくて、新築しました。「夢の継承事業」ということで2002年から2004年にかけて、皆さんでいろいろ議論しながらつくり上げていったものですが、この20年間、いろんな使い方をしてくる中で、世代交代もあって今少し体制も変わりました。土曜日、日曜日、祝日と水曜日に開室しています。




これは立原道造さんが描いたスケッチで残っているものすべてですけれども、これらを手掛かりにつくりあげました。実際に使い始めたのが、2004年の11月６日です。その時にこんな模型も作りましたが、これは実は、立原道造を記念する記念館っていうのが東京都文京区の東大弥生門の前にあったんですけれども、そこに展示するために作った模型だったんです。そちらが残念ながら2011年に休館してしまいまして、今は軽井沢高原文庫の方に展示されています。

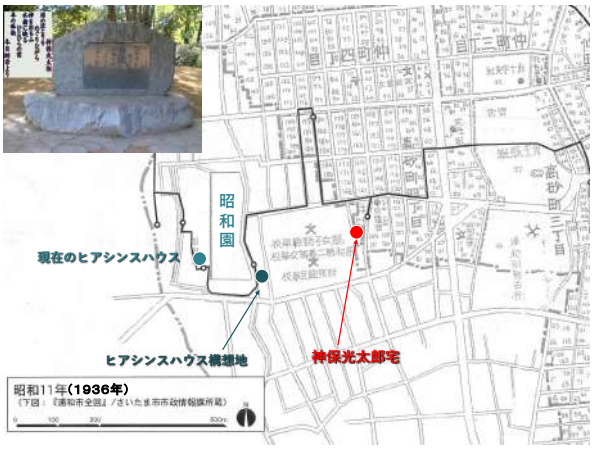



## 別所沼のそばの高台に住んだ神保光太郎

「立原道造とヒアシンスハウス」というと、まず、立原道造さんがなんで浦和の別所沼の畔にヒアシンスハウスなるものを構想したんだろうかという大きな問いがありまして、よく聞かれます。僕は立原道造じゃないので、わかりません。ただ大きなきっかけは、この神保光太郎さんという方で、ウィキペディアによると、山形県山形市生まれで本名は「みつたろう」さんというそうです。名字も「じんぼ」ではなくて「じんぼう」とするのもあるそうですが。「京大の文学部の独文科を出て、新散文詩運動の一翼を担う。29歳の時に埼玉県浦和市、現さいたま市の別所沼のほとりに家を新築し、生涯にわたって活動の拠点とした。この別所沼の家に、神保を兄と慕う立原道造の来訪をしばしば受けている」ということで、兄というふうに見ていたというのが、この立原道造さんと神保さんの関係だったとウィキペディアに書いてあるんですね。

これは、筑摩書房から６巻本で出ている立原道造全集なんですけれども、その中の第５巻っていうのが「書簡」という巻で、その中に道造さんから光太郎さんへの書簡があります。そこからふたりの交流の舞台となっているこの浦和というのをちょっと見てみようというのを、今回試みています。

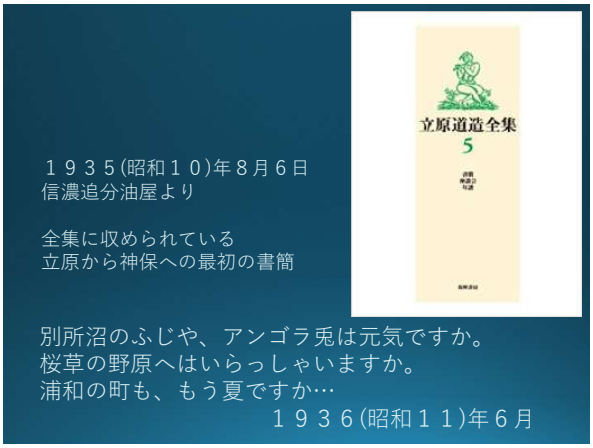



ちょうど道造さんがヒアシンスハウスを構想していた時期というのが、スケッチなどから見ると1936年から1938年ぐらいにかけてなんですが、神保さんのおうちがすでにここにある。実は構想の場所は、はっきりはわかんないんですけれど、スケッチなどから考えるとこの辺なんじゃなかろうかと。現地に建てているヒアシンスハウスはここなので、正直言うと場所は違うんです。

神保光太郎さんのおうちは埼玉大学教育学部附属中学校のすぐ脇です。旧女子師範、浦和第二女子高等学校の場所が、今は埼玉大学教育学部附属中学校がある場所です。神保さんは別所沼のところに、今、詩碑があったりもします。そのぐらいこの場所には縁があるという方です。

これは神保さんが書かれている埼玉大学教育学部附属中学校の校歌です、僕は卒業生なんで覚えてますが、「咲き匂う 武蔵の沃野 明け初めし 日本の未来 共に背負いて・・・」という重すぎる歌詞です。で、やはり出てくるのがこの「武蔵の沃野」だったり、「仰ぎ見る千古の富士よ」だったり、なんです。だからやはり、武蔵の台地の肥沃な土地ってい

うような感覚であったりとか、ちょっと高台で、この頃はまだ西の方には埼京線も新幹線もないですから富士が見えました。この辺の大宮とか浦和の小学校中学校の校歌って、だいたい「仰ぎ見る富士」とかありますよね。そんなにみんな、西ばっかり見てたのかと思うんですけれど、逆に高台から西を見ると、富士がよく見えたのであろうということも、こういう校歌からもわかるかなと思っております。




## 神保光太郎宛の頻繁な書簡

　ここから書簡を見ていきたいんですけれども、まず最初に、信濃追分の油屋というところから、神保さんに立原さんからお手紙を出してます。1936年６月です。

「『明日は夏、光と望みと明るさの、そよ風とながれとの叢の、明日は夏！』などと、即興の詩を口ずさみながら、ぼんやりしていたり、」

やっぱり詩人は全然違うなと思うんですが、その中に「別所沼のふじやアンゴラ兎は元気ですか。桜草の野原へはいらっしゃいますか。浦和の町も、もう夏ですか。」って聞いてるので、この頃にはすでに立原さんは浦和を訪れているんだなあっていうのはわかります。でもこれ、男性が男性に宛てる手紙だとすると、なかなかにう～ん、って感じではあるんですけれども。この頃、図書館を設計しています。ちょうど彼が東京帝大の建築学科の学生だった時の状況ですね。

「きょうは日曜日なので誰かになつかしいたよりを書きたくて、誰にしようかしらと心のなかをさぐりました。それもたのしい心のあそびでありました。」

ということなんですね。今だったらトランプ大統領以上にツイッターでいろいろ全世界に発信しているかもしれないんですが、ただこれは、個人から個人に宛てている手紙なので、むしろこういった気持ちを神保さんに宛てたいっていうことが、立原さんの中ではあったのかなと。

　次に浦和が出てくるのが同じ年の9月なんですけれども、なんか詩を読んでるんでしょうね。

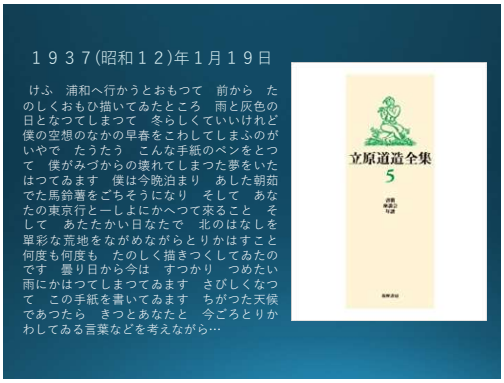
「シュトルムのヴェロニカのなかにわかりにくい

拝啓
けふは風がひどいです。
おかはりありませんか。
　屋根裏部屋ももうぢきに夏休みです。烈しい光と暑さと、夜になつての涼しさがもう毎日毎日訪れます。寒い雨の日や吹雪の夜とがとほい夢のなかの物語になつてしまいまひました。乏しい火をかこんで、たつたひとつの物思ひに、そのためにかなしくなつたり、うれしくなつたりして過ぎた日々も。「明日は夏、光と望みと明るさの、そよ風とながれとの叢の、明日は夏！」などと、即興の詩を口ずさみながら、ぼんやりしてゐたり、旅の日の地圖を描いたり、部屋を掃除したりしてゐると、すぐに時間がたのしくながれてしまひます。別所沼のふじや、アンゴラ兎は元氣ですか。櫻草の野原へはいらつしやいますか。
　浦和の町も、もう夏ですか。
　　☆
　このごろ、圖書館を設計してゐます。學校勉強です。
　〔註・圖書館のデッサンあり〕
　この繪のやうなデザインはどうですか？
　この圖書館の設計圖を描きあげると夏休みになります。
　　☆
　けふは日曜日なので誰かに、なつかしいたよりを書きたくて、誰にしようかしらと心のなかをさぐりました。それもたのしい心のあそびでありました。
　では、これで、筆をおきます。
六月十四日　草草。
立原道造　神保光太郎様

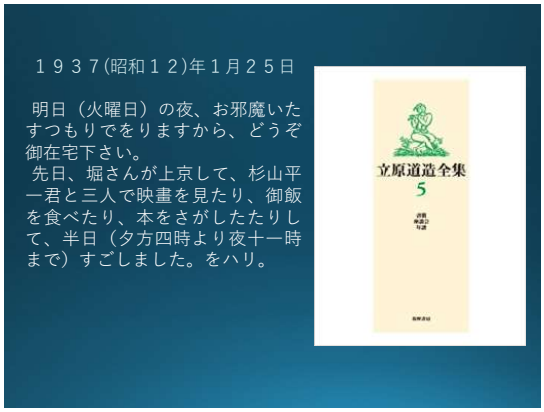
１９３６(昭和１１)年９月９日

シュトルムのヴェロニカのなかにわかりにくいところいくらもあり困つてゐます
そのうち浦和に習ひに行きたいのですが
そのまへに東京の方にお出になつたらどこかでお會ひして教えていただきたいとおもひます
浦和へは四五日うちに伺ふかも知れません
早く山本書店に渡してしまひたいのです

ところがいくらもあり困っています。そのうち浦和に習いに行きたいのですが、そのまえに東京の方にお出になったら、どこかでお会いして教えていただきたいとおもいます。浦和へは四五日うちに伺うかも知れません。早く山本書店に渡してしまいたいのです。」
ここからは、翻訳かなんかもやってたのかなというふうには見えるんですけれども、こういった時に、やっぱり浦和に行って相談をしたいっていうのもあったのかなと思います。
　年が明けて昭和12年の１月です。




「きょう　浦和に行こうとおもって　前から　たのしくおもい描いていたところ　雨と灰色の日となってしまって、冬らしくていいけれど、僕の空想のなかの青春をこわしてしまうのがいやで　とうとう　こんな手紙のペンをとって　僕がみずからの壊れてしまった夢をいたわっています　僕は今晩泊まり　あした朝茹でた馬鈴薯をごちそうになり　そして　あなたの東京行きと一しょにかえって来ること　そして あたたかい日なたで　北のはなしを単彩な荒れ地をながめながらとりかわすこと　何度も何度も　たのしく描きつくしていたのです　曇り日から今は　すっかりつめたい雨にかわってしまっています　さびしくなって　この手紙を書いています　ちがった天候であったら　きっとあなたと　今ごろとりかわしている言葉などを考えながら・・・」
ということで、もう涙腺が弱い人は大変かもしれないんですけれども、やはり、なかなか気まぐれさんですよね。「今日、朝起きたら天気が悪いからやめた」って書けばいいのにと思うんですけれど、やはり、その中でいろんな心の動きを文章化するというか、なんかその辺のことをわかってくれるだろうと神保さんに宛ててるんでしょうけど、やっぱり僕が注目するのは、一緒に帰って来たりするとき、東京と浦和のこのある種の距離感、なんか共有できるかもしれない、旅行とはまた違う、道造さんにとっての浦和とのこの距離感っていうのが見て取れるような感じがしますね。

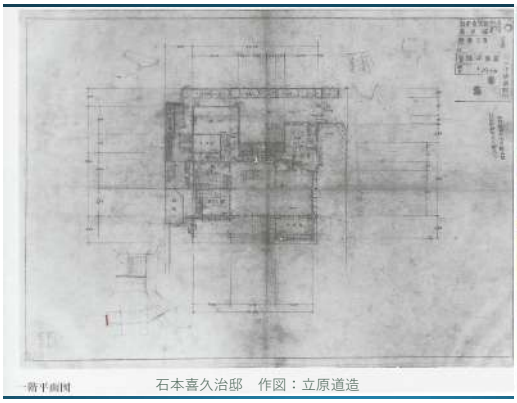



　この１月19日の１週間後です。
「明日の夜、お邪魔いたすつもりでおりますから、どうぞご在宅ください。」
やはり電話のない時って大変だなと思います。わざわざ手紙でお知らせしないといけないんですね。これで、明日行くんだなっていうのがわかったので、ちょっとこれを引っ張ってきたんですけれども。ある意味、そのぐらい頻繁にやり取りしていたのかなと思います。

## 大学卒業後の勤めで挫折？

　ちょうどこの時期の立原さん、大学の卒業で、卒業設計と卒業論文の両方を提出する中、「浅間山麓

卒業設計　　浅間山麓に位する藝術家コロニイの建築群
「新建築」１９４０年（昭和１５）　４月号より



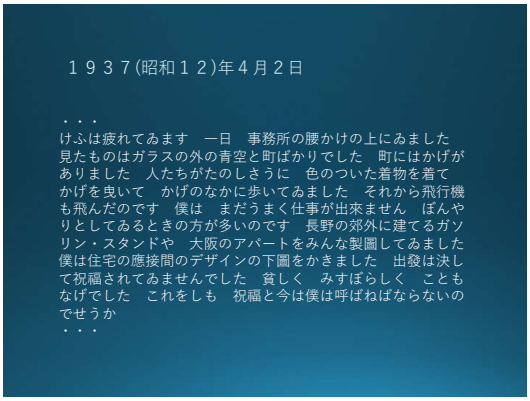
一階平面図　　石本喜久治邸　作図：立原道造

「某病院計画案」『新建築』第14巻第7号　1938年（昭13）7月30日　新建築社
口絵に掲載された透視図は、立原が石本建築事務所で携わった仕事の一つである。

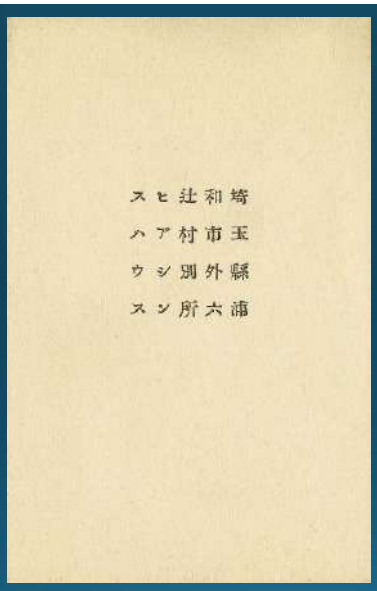
に位する芸術家コロニイの建築群」という卒業設計を３月に提出するんですね。

卒業後、分離派建築会のひとり、石本喜久治さんの石本建築設計事務所というところに就職します。彼はいきなり石本さんのご自宅を担当させられまして、そこの作図されているのが残っています。さらにこんな完成予想パースを描かされています。これは後でいろいろ調べたらわかったんですが、聖ヨゼフ病院という海軍病院です。つい最近まであって実際見てきて撮った写真なんですけれど、３年前に取り壊されています。

そんな時、普通は４月１日からお勤めだと思います。石本事務所もそうだったんじゃないかと思いますが、４月２日です。




「今日は疲れています　一日　事務所の腰かけの上にいました　見たものはガラスの外の青空と町ばかりでした　町にはかげがありました　人たちがたのしそうに　色のついた着物を着て　かげを曳いて　かげのなかに歩いていました　それから飛行機も飛んだのです　僕は　まだうまく仕事が出来ません　ぼんやりとしているときの方が多いのです　長野の郊外に建てるガソリン・スタンドや　大阪のアパートをみんな製図していました　僕は住宅の応接間のデザインの下図をかきました　出発は決して祝福されていませんでした　貧しく　みすぼらしく　こともなげでした　これをしも　祝福と今は僕は呼ばねばならないのでしょうか・・・」




立原道造のデザインした名刺

辛いですよね、というのを神保さんに宛てるんです。もらった方もなかなか大変だと思いますけれども、２日目で仕事ができるはずはないじゃないとは思いたいんですが、そのぐらい自信もおありだったんでしょうか。

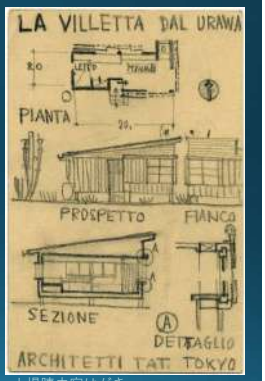
その後、１年勤めるか勤めないか、実は夏ぐらいから休職をするんですよね。その過程でヒアシンスハウスの構想を始めます。そこで「埼玉県浦和市外六辻村別所ヒアシンスハウス」っていう、こんなタイポグラフィックな名刺をつくります。ビジュアルデザイン的にすごく練れてるものだと思います。この正方形の中にちょうど漢字が３行入ってカタカナが２行入って、４字で５行。彼はソネットっていう４行４行３行３行の12行詩をつくりますが、要するに構築的かつ視覚的ビジュアル的な詩をつくるんですけれども、こういうところにも表れています。

## ヒアシンスハウスは逃避の場所？

１９３７(昭和１２)年１２月１７日

小場晴夫（東大建築学科同級生）宛

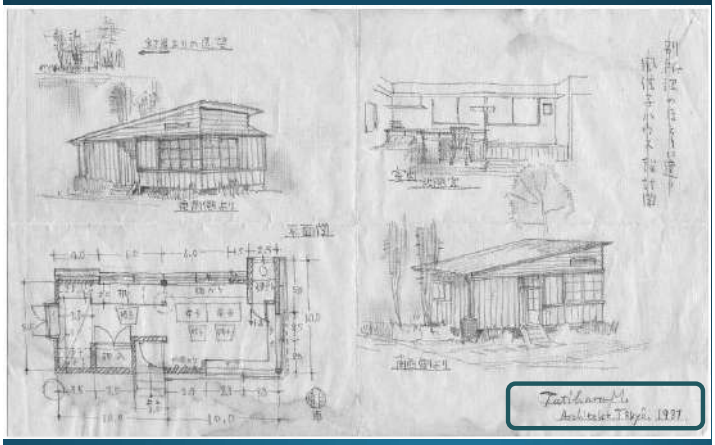
……僕は疲れてゐる。何者にも。いつの間にか、僕は自分の晩年に就て考へてゐる僕を見出す、どんな陽気な問ひからはじまつても、僕はやがて自分の晩年をロマンのなかに悲しく描きはじめてしまふ。浦和に行つて沼のほとりに、ちひさい部屋をつくる夢、長崎に行つて古びて荒れた異人館にくらす夢、みんな二十五六歳を晩年に考へてゐるかなしいかげりのなかで花ひらくのだ。




小場晴夫宛はがき
１９３８（昭和１３）年２月７日

12月17日に初めて、実は神保さんではなくて、小場晴夫さんという東京帝大の建築で同期だった方に、「浦和に行って沼のほとりに小さい部屋をつくる夢」について言います。その時に、この名刺をつくったというようなことなんですね。その小場さん宛てのハガキがこれです。ここに描かれている断面図が、実際につくる時の大きなヒントになりました。このハガキには「僕は疲れている。何物にも。いつの間にか、僕は自分の晩年について考えている僕を見いだす。どんな陽気な問いから始まっても、僕はやがて自分の晩年をロマンの中に悲しく描きはじめてしまう。浦和に行って、沼のほとりに、ちいさい部屋をつくる夢、長崎に行って古びて荒れた異人館にくらす夢、みんな二十五六歳を晩年に考えているかなしいかげりのなかで花ひらくのだ。」

＊無断転載禁止



個人蔵　１９３７（昭和１２）年冬（１２月？）ころ

と書かれています。なかなかにアンニュイな内容です。その中で生まれてきた自分ひとりのための小さい部屋、ここにちゃんと「LA VILLETTA DAL URAWA」と書いてあって、なぜか全部イタリア語なんですが、もしかしたら、彼の中での「浦和」というのは、ひとりで逃げる、逃避する、そういうような意味も籠っていた場所なんじゃないかなというところでしょうか。

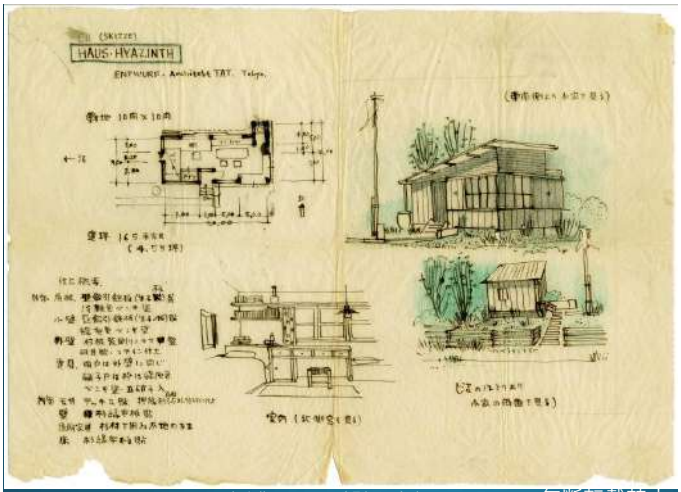
同じ頃に、また別の生田勉さんという方に宛てて手紙を出します。彼は、駒場の旧制第一高校で同級生だった方で、東京帝大の建築学科に入った時には実は生田勉さんは最初は農学部に行くんですけれど、建築は面白いよって道造さんが言ったら、生田さんも、じゃ俺も建築に行こうかなって言って後輩になるっていう関係なんです。その生田さんはその後東大の駒場の教授になられるんですが。生田さんのところにこれ（ヒアシンスハウスのスケッチ）をペロッと送るんです、手紙と一緒に。

１９３８(昭和１３)年２月１２日

あなたのお言葉のをはりにもヒアシンス・ハウスのことがしるされてゐましたのでたうとうこの手紙の最后で僕の夢想をいちばんあとにまでかくしておかうとしたあなたにお知らせいたしませう同封しましたのがその計画の製図されたものです　旗は深沢紅子さんがデザインしてくれることになつてゐてそれは僕にもどんなのが出来るのかわかりません　ヒアシンス・ハウス・（風信子荘）といふ名前です（土地のことを具体的に早く定めなくてはならないのですがいつお会ひ出来るでせう）
（中略）
２、同封の図面は二つありますが、地主さんにお会ひになりましたらちよつとお伝へおきねがひたくどちらでもいいから見せておいて下さい　僕も行つて早く土地を正式に借り受けたいと存じます百坪などいらないのですがあまりすくなくては貸してもらへないとおもひますので百坪と申します　出来たら五十坪ぐらゐでいいとおもふのですが五十坪のなかへ四坪半の小家―― を建ててもまだ広すぎる位です
３、里見さん（註：里見明正）にもはなしておいて下さい　僕は近いうち日曜日にもつと正確な設計図を持つて浦和に行きます　そのときに僕がはなすことがありすぎると混乱してしまうだらうとおもひますゆゑ予備知識を画家（註：須田剋太）たちに注ぎこんでおいていただければ幸せです（実行家のエスプリでせう――）

「あなたのお言葉の終わりにも、ヒアシンス・ハウスのことがしるされていましたので、とうとうこの手紙の最後で僕の夢想をいちばんあとにまでかくしておこうとしたあなたにお知らせいたしましょう」と書かれています。これだけお世話になっておきながら、隠すなよって思うんですけど。小場さんとか生田さんには結構ガチな手紙を出しているのに、あなたには最後ですからっていうのは、ちょっと突っ込みたいところです。

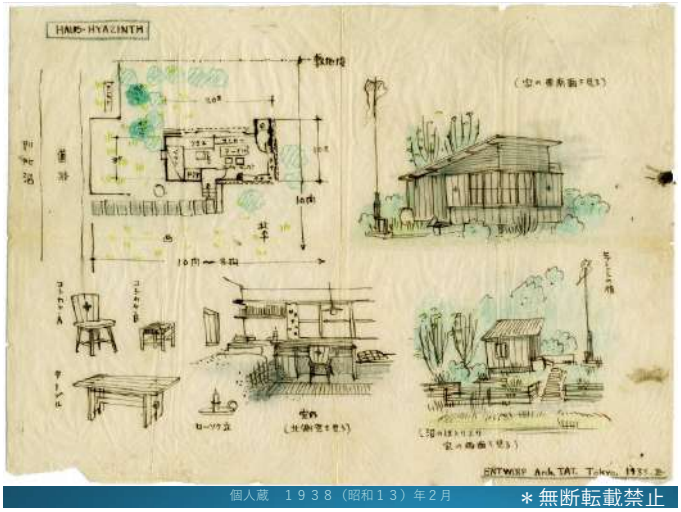
「同封しましたのが、その計画の製図されたものです。旗は深沢紅子さんがデザインしてくれることになっていて、それは僕にもどんなものができるのかわかりません。ヒアシンス・ハウス（風信子荘）」ヒアシンス・ハウスを漢字で、風を信じる子「という名前です。（土地のことを具体的に早く定めなくてはならないのですがいつお会いできるでしょう）」



個人蔵　１９３８（昭和１３）年２月　＊無断転載禁止

なかなかにマジな感じなんですね。中にいろんな話題が入っています。そして

「２番目、同封の図面は二つありますが、地主さんにお会いになりましたらちょっとお伝えおきねがいたく、どちらでもいいから見せておいてください。僕も行って早く土地を正式に借り受けたいと存じます。百坪などいらないのですが、あまり少なくては貸してもらえないと思いますので百坪と申します。出来たら五十坪ぐらいでいいと思うのですが、五十坪のなかへ、四坪半の小家」小さい家「を建ててもまだ広すぎるくらいです」



個人蔵　１９３８（昭和１３）年２月　＊無断転載禁止

その２枚同封しているものというのが、ちょっとこの色のついたスケッチ２枚です。

　ここにいろいろと情報が載っているので、中のインテリアのこの家具ですとか、アプローチの感じですとか。ヒアシンスハウスの左側に「道路」「別所沼」と書かれ、上が北ってなってますから、ヒアシンスハウスが別所沼の東側にあるっていうのが、実はこれでわかるんですね。

https://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/ijin/satomiakimasa.htm
https://www.city.kounosu.saitama.jp/site/konosu-education/2348.html
里見明正（1912～1974）
熊谷市の誇る"情熱の画家"
須田剋太（1906～1990）
司馬遼太郎「街道をゆく」挿絵画家

「里見（明正）さんにもはなしておいて下さい。僕は近いうち日曜日にもっと正確な設計図を持って浦和に行きます。そのときに僕がはなすことがありすぎると混乱してしまうだろうとおもいますゆえ予備知識を画家（註：須田剋太）たちに注ぎこんでおいていただければ幸せです（実行家のエスプリでしょう）」

ここは、最後は自分は実務やってるよっていう自負があるんだと思うんですけれども。ここに浦和画家の里見明正さん、須田剋太さんが登場します。どうも、すでに交流をしていたのではないかということが見えます。里見さんは1912年生まれで74年没ですが、熊谷市出身で熊谷市の誇る情熱の画家さん。須田剋太は、司馬遼太郎の「街道をゆく」の挿絵画家で有名ですし、奈良の新薬師寺に行きますと須田さんの壁画が残ってたりします。

## 終の棲家をヒアシンスハウスに求めた？

１９３８(昭和１３)年２月中旬　深沢紅子（画家）宛

浦和が僕にあたらしいふるさとを与へてくれればいいとねがひます。

（中略）

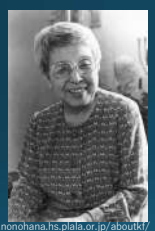
浦和に建てるヒアシンス・ハウスの図面を同封しました。旗のデザインをして下さいましたら、たいへんにうれしく存じます。それは憲ちやんにしてもらふ方がいいでせうか―― 三月ぐらゐまでにはこの家に移りたいとおもつてゐます。

１９３８(昭和１３)年３月下旬頃　高尾亮一（旧制一高の先輩）宛
……それから、「ヒヤシンス・ハウス」といふ週末住宅をかんがへてゐます。これは、浦和の市外に建てるつもりで土地などもう交渉してゐて、これはきつとこの秋あたりには出来てゐるでせう。五坪ばかりの独身者の住居です。これも冬のあひだしよつちゆうかんがへ、おそらく五十通りぐらゐの案をつくつてはすててしまひました。今やうやくひとつの案におちついてゐます。―― 図面で説明すれば、すぐわかるのですが、それはけふはやめにして、……

さらにその旗を頼みたいという深沢紅子さんに、日付がはっきりわからないんですが、
「浦和が僕にあたらしいふるさとを与えてくれればいいとねがいます。」
すごく素敵なことを言っています。「僕にあたらしいふるさとを与えてくれればいい」だから、週末に1人で暮らすのもそうなんだけれども、ここがもしかしたら終の棲家になったらいいんじゃないかぐらいの気持ちを持っていたのかもしれないですね。
「浦和に建てるヒアシンス・ハウスの図面を同封しました。旗のデザインをしてくださいましたら大変にうれしく存じます。それは憲ちゃん」、伊藤憲治さんというグラフィックデザイナーの方なんですけれど、「憲ちゃんにしてもらう方がいいでしょうか。三月ぐらいまでにはこの家に移りたいとおもっています。」
もう本当にそう思ってるんですよ、この頃に。

それで、深沢さんに宛てていた頃からひと月経って、高尾亮一さん、旧制一高の先輩で、その後の宮内庁にお勤めになって、今の迎賓館の担当をされる官僚になられる方なんですけれど。
「それから「ヒアシンス・ハウス」という週末住宅を考えています。これは浦和の市外に建てるつもりで土地などもう交渉していて、これはきっとこの秋あたりには出来ているでしょう。五坪ばかりの独身者の住居です。これも冬のあいだしょっちゅうかんがえ、おそらく五十通りぐらいの案をつくってはすててしまいました。今ようやくひとつの案におちついています。図面で説明すれば、すぐわかるのですが、それは今日はやめにして云々」
というふうに書いてあります。

１９３８(昭和１３)年４月上旬　深沢紅子（画家）宛
ヒアシンス・ハウスのこと、その家のとなりに住んでゐる絵描きさん（註：里見明正）が六日から写生旅行に行くので、そのアトリエを借りて家の出来上らない先に浦和に移らうとおもひます。浦和からのたよりでは、今花が美しいと言つて来ました


http://www.nonohana.hs.plala.or.jp/aboutkf/

http://www.kanazawatallesm.com/look/kouko
「深沢紅子野の花美術館」

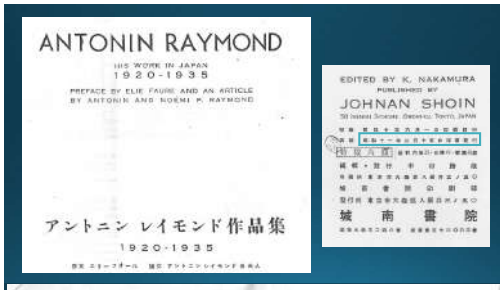
深沢紅子（1903年3月23日 - 1993年3月25日）
日本の洋画家。岩手県盛岡市出身。夫深沢省三も洋画家・童画家。
戦前戦後を通じ、堀辰雄や立原道造らの本の装幀のほか、童話の挿絵なども多く手がけた。深沢夫妻は作品を描き続ける一方、絵画指導を通じて児童教育にも熱心に携わった。

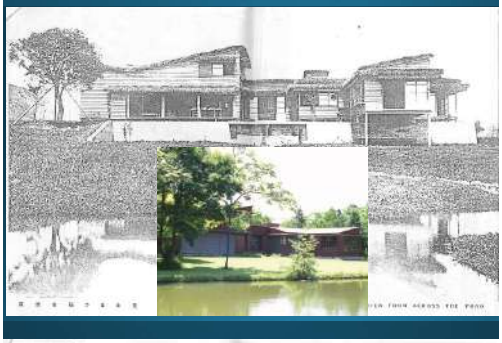
深沢紅子さんは、こういう方です。旦那さんの省三さんも絵本画家さん、童画家さんなんですけど。４月になると
「ヒアシンス・ハウスのこと、その家のとなりに住んでいる絵描きさん（里見さん）が六日から写生旅行に行くので、そのアトリエを借りて家の出来上がらない先に浦和に移ろうとおもいます。」
これもなかなか図々しいと思うんですけれども。
「浦和からのたよりでは、今花が美しいと言って来ました。」
本当にここまでは、かなり段取ってたっていうことがわかります。

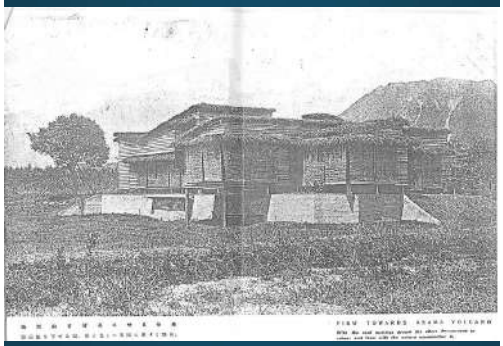
実は彼はこの後、深沢さんの出身地、岩手の盛岡に旅行に行き、その後、同僚だった武基雄さんという建築家の実家、長崎に行き、身体を壊して結核になって亡くなるんですが。

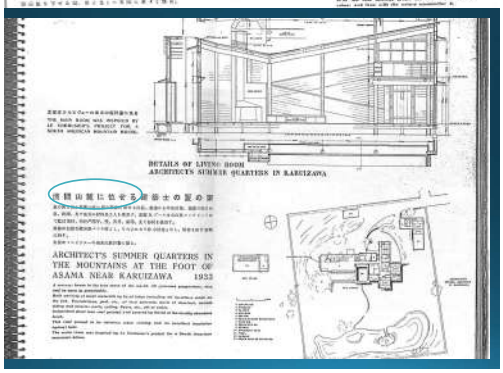
卒業設計　　浅間山麓に位する藝術家コロニイの建築群
「新建築」１９４０年（昭和１５）　４月号より

## アントニン・レーモンドの夏の家から卒業設計へ








どうもこのヒアシンスハウスは、やはり彼が前に卒業設計でやったこの「浅間山麓に位する芸術家コロニーの建築群」というのを実現したいんじゃなかったのかと。ただ、この場所は軽井沢のちょっと西側の信濃追分っていうところで、彼ら四季派の詩人たちが常宿にしていたのはこの油屋というところです。

ちょうど昭和11年ぐらいに、このアントニン・レーモンドという方が作品集を出しました。軽井沢にはこんな「夏の家」、夏の間の仕事場がありました。今、こんな形でペイネ美術館になっています。この前、重要文化財になりました。裏から見ると、板の上に茅を乗せているような仕上げになっているんですけれども。

この作品集や現物を立原が見ていたんではないかと。というのも、この作品集に「浅間山麓に位せる」っていうタイトルがついてるんですね。彼の卒業設計が「浅間山麓に位する」っていうタイトルをつけているというところも、ひとつのオマージュなんではなかろうかと。

この卒業設計の中にいろんな芸術家の場所があって、そこに「集落内の一小住宅」というのがあるんです。
「住むものが独身であるときには厨房を欠いている。これはロッジに食事が常に用意されているからである。」
これまた非常に図々しい発想ですけれども、でもコンビニで弁当を買うよりいいだろうという感じですよね。

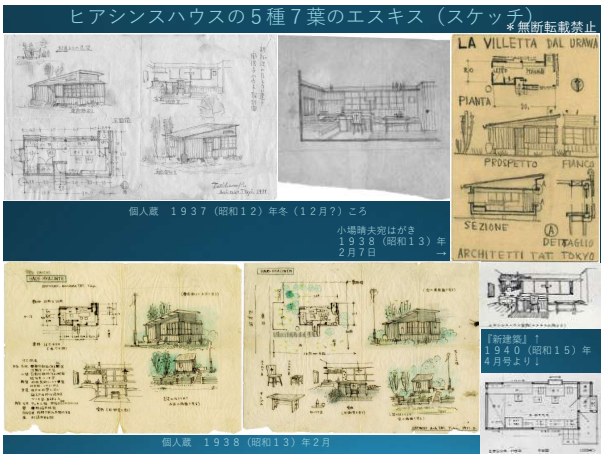
立原さんは、これからの社会基盤になっていく立派な鉄

卒業設計　　浅間山麓に位する藝術家コロニイの建築群

「住むものが独身であるときには厨房を欠いている。
これはロッヂに食事が常に用意されているからである」

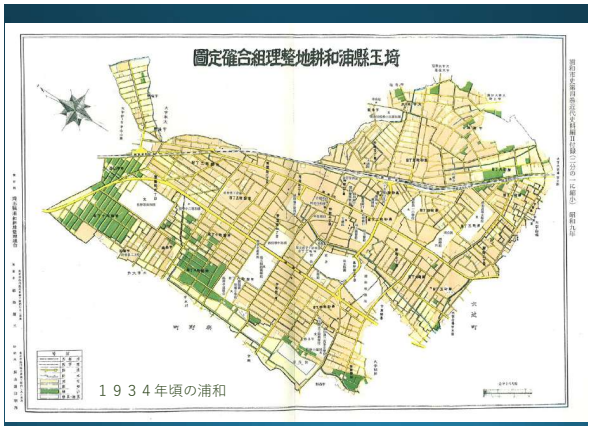
東京帝国大学工学部建築学科　岸田日出刀教室

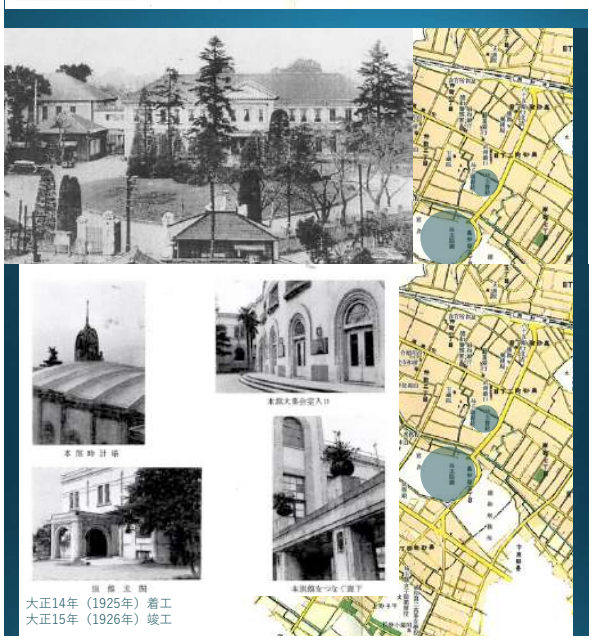
前列左から岸田教授、石井柏亭講師
後列左から市浦健、稲本一夫、柴岡亥佐雄、立原道造、福田光夫、田口正




筋コンクリート造の都市建築を担うべき東大建築にいらっしゃるんですけれども、ちょっと線が細いなという感じは見受けられるかと思います。

## 立原道造が見ていた文教都市浦和の風景




卒業設計というのは、得てして実現困難なストーリーというのが多いんですけれど、彼が卒業設計で考えたことの延長に、このヒアシンスハウスがあって、手の届きそうな夢の一部を、軽井沢の追分ではなくて浦和の別所で実現しようとしたんじゃないかと。それで、先ほど安野先生もお出しくださったこの「埼玉県浦和耕地整理組合確定図」が出てくるわけです。これ、昭和９年、1934年頃の浦和です。当時の県庁、埼玉会館はこんな感じです。浦和から別所沼の方に行くには絶対通るところですので、だんだん浦和が近代都市になっていくという様を、彼も見ていたんではないか。ちょうど昭和の10年代ですから、街の中に埼玉会館がもうとっくに馴染んでいる頃ですよね。少なくとも埼玉会館が出来て10年は経っているときです。

この設計をしたのが岡田信一郎なんですが、ちょっと今日触れておきたいのが東京府美術館、東京都美術館なんです。これも岡田さんが設計するんです。今の東京都美術館は前川さんの設計になっていますので、岡田さんが設計したものがある程度熟成すると、前川さんに代わるっていうようなことがあるのではないかなというのはひとつあります。とにかく様式建築のスペシャリストとも呼ばれていたんですけれど、変幻自在にいろんなことができるんですね。和風意匠を表現した歌舞伎座であったり、日本における西洋様式建築の最高傑作と評される明治生命館、これも重要文化財で残っています。それからイギリス風邸宅の鳩山一郎邸、これらをやる中で、ただ「理論面では新しい時代の建築表現を指向しながら、実作品では過去の様式を多用

岡田 信一郎　1883～1932（明治16年～昭和7年）

大正・昭和初期に活躍した建築家。
大阪市中央公会堂（原案）や東京府美術館、歌舞伎座、明治生命館などの設計作品で知られる。

東京帝国大学建築学科を卒業した後、東京美術学校（現・東京芸術大学）と早稲田大学で教壇に立ち、今和次郎、今井兼次、三井道男、吉田五十八、岡田捷五郎（実弟）、村田政真、吉村順三ら多くの後進を育成した。

病弱なため外遊をする機会はなかったが、海外の建築雑誌等を通して近代建築の動向を把握し、優れた建築評論を執筆している。

設計作品には鉄筋コンクリートで和風意匠を表現した歌舞伎座、日本における西欧様式建築の最高傑作と評される明治生命館、イギリス風邸宅建築の鳩山一郎邸などがある。和洋を問わず、歴史的な建築様式を自在に用いた建築家である。

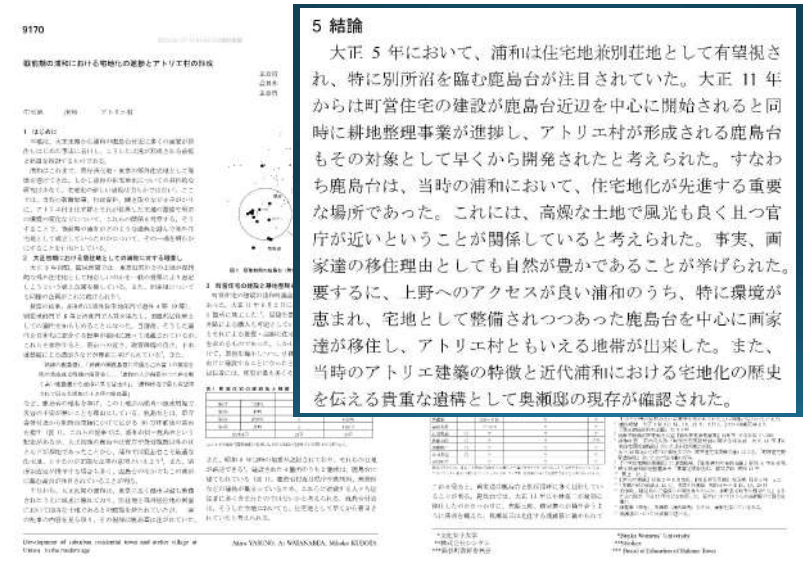
理論面では新しい時代の建築表現を指向しながら、実作品では過去の様式を多用しており、モダニズム建築の立場から言行不一致と評されることもある。

明治建築の文化史的な意義を認め、関東大震災で大きな被害を受けたニコライ堂（コンドル設計）、日本赤十字社本社（妻木頼黄設計）などの修繕も行っている。

（Wikipediaより）

しており」とは言いながらも、「モダニズム建築の立場から言行不一と評されることもある」とウィキペディアに書いてあるんですけれど、こと埼玉会館で言えば、むしろ表現派風であり、これからのモダンデザインっていうのをやっていこうとしているのが見えていて、それを立原道造は浦和に通う中で見てたんじゃないかなと思います。

さらに文教都市という中で、北浦和公園のところに旧制浦和高等学校があります。旧制浦和中学校が今の知事公館のところにあります。戦後に旧制浦和中学校が新制の浦和高校になりますけれども、この校歌も「校舎の礎動きなき我が武蔵野の鹿島台」って、やっぱり鹿島台が入ってるんですよね。



戦前期の浦和における宅地化の進捗とアトリエ村の形成(2002年度大会 (北陸) 学術講演梗概集)

安野先生がまとめてくださったことをちょっと参考にすると、「大正５年で、浦和が住宅地兼別荘地として有望視され、特に別所沼を望む鹿島台が注目されてました」「上野へのアクセスが良い浦和のうち、特に環境が恵まれ、宅地として整備されつつあった鹿島台を中心に画家たちが移住し、アトリエ村と呼ばれる地帯が出来た。またその当時のアトリエ建築の特徴と近代浦和における宅地化の歴史を伝える重要な遺構としての奥瀬邸のというのがあります。」ということで、奥瀬邸の話もあったと思いますが、そういったところと立原さんの構想というのとちょうどマッチしたのが、昭和12、13年という辺りなのかなと。

大正初期の別所沼を見ますとこんな感じでした。沼です。茅葺きの農家がまだあったりする。本当に田園ですね。それが、昭和元年の12月に東

(株)国書刊行会　発行
「ふるさとの思い出　写真集　明治大正昭和　浦和」（青木義脩　編著）
『六辻村史写真帖』より

(株)国書刊行会　発行
「ふるさとの思い出　写真集　明治大正昭和　浦和」（青木義脩　編著）
『六辻村史写真帖』より

(株)国書刊行会　発行
「ふるさとの思い出　写真集　明治大正昭和　浦和」（青木義脩　編著）
『六辻村史写真帖』より

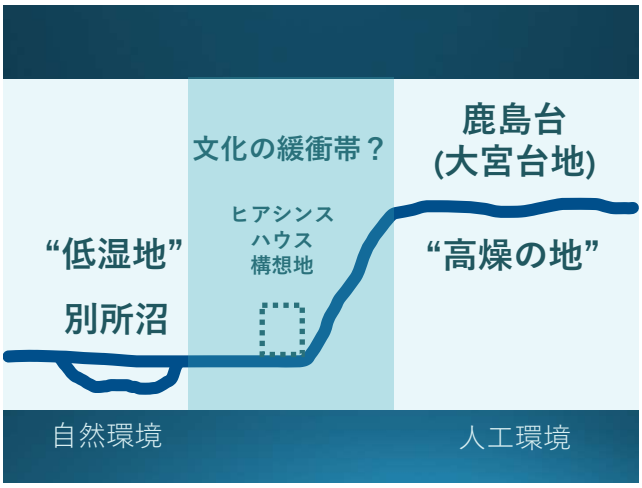
浦和市立郷土博物館　編集発行
「記憶の中の風景－写された20世紀の浦和－」（高野博明氏提供）

昭和36(1961)年の別所沼の写真

2005年春

京の小島さんという方が、この湿地として使い物にならなかった土地を借り受けて、昭和園というのを整備していきましょうと、実質的に始まったのが、昭和２年ごろで、ちょうど今、百年になるぐらいだと思うんですけれども。改めて遊園地・昭和園ってなったのが1951年、戦後昭和26年のことだそうですが、そこから10年ぐらい経つと、もうだいぶ整備されて、後ろには団地のようなものが見えます。今あるヒアシンスハウスが出来たばっかりぐらいの2005年春は、こんなような感じになっています。

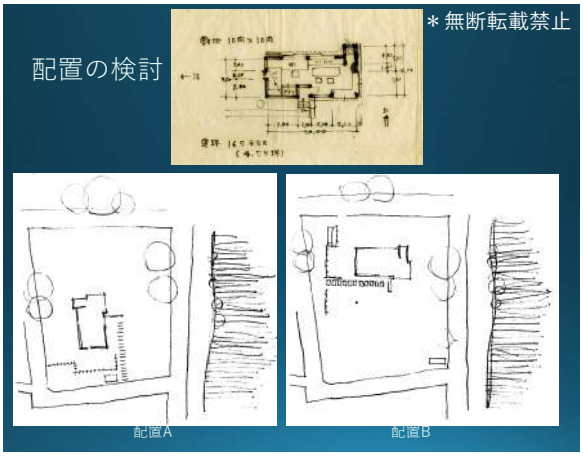
## 高燥の地と低湿地の「際」に集まる芸術家




雑駁な絵で恐縮ですけれども、今日はこんな仮説を考えてみました。実際はこんな高低差はないんですけれども、気持ち的に10倍ぐらいにしてみたんですが、台地側に高燥の地、鹿島台があります。別所沼の方は低湿地です。元々こういった崖線の脇で湧き水が出てくるところに沼だったり、それこそ見沼も大宮台地の東側でこういう沼ができる。

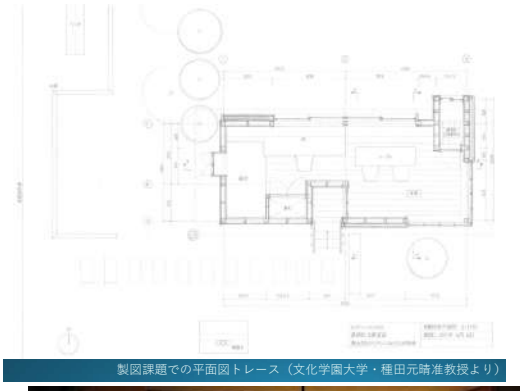
ちょうど人工環境がだいぶ近代化してきて出来てくるところと、まだ手付かずの自然、茅葺きの民家が残っているところのちょうど縁にあたるところ。そんなところにヒアシンスハウスを構想する。その隣に里見さんのアトリエがある。浦和画家も比較的その鹿島台の縁、むしろ沼に近い方にいて、太田美術額縁さんもそういう需要があるので生まれてくる。これは、もしかしたらこういうところというのは、都市文化とまだ自然を叙情的に歌う詩人ですとか、そういったのを描こうとする画家さんたちの文化が交わるような意味があったんじゃないかなと思います。ある種の文化の緩衝帯。そういったところをまたレクリエーションの場にしていこうっていうのがひとつある。そういった位置づけがあって、詩人で建築家の立原道造は、そういった嗅覚を持っていたんではないのか。先に神保さんがこういうところに住まう。まさに神保さんの住んでいたところは、この高燥の地の「際」だと思うんですよね。やっぱりこの「際」っていうのがポイントなのかなとは思います。

## 実際につくってみて、卒業設計の思いが感じられたヒアシンスハウス




だから実際につくるヒアシンスハウスの配置は、すごい悩ましかったんです。沼に対してここの敷地が与えら

2005年春


製図課題での平面図トレース（文化学園大学・種田元晴准教授より）

れて、じゃあどうやって配置しようか、どうすればいいんだろうってあったんですけれど、結局、道造さんの絵のこの窓は東南の角にバアッと開きたいよね。じゃ、沼との関係は逆になっちゃうけど、この窓の位置で方角を守ろうということで、今の配置にしています。ですので、沼との関係はやっぱり逆になっています。だから彼としては、本当はやはり沼の東側の方がより「際」度が高いので、そっちの方が本当は彼としては狙い目だったんだと思います。

これは竣工したばっかりの時の写真です。この方は東京帝大建築で立原道造さんと同期だった渡会（わたらい）正彦さんで、当時80いくつかで、さすがにその数年後に鬼籍に入られました。また、著名な建築家・丹下健三さんより立原さんの方が年齢はひとつ下です。ただ、丹下さんは二浪してるから帝大では立原さんのほうが学年はひとつ上でした。

こういうふうに、やはり沼の西側に出来ると、もちろん今の場所も決して悪くないんですけれど、彼のこの卒業設計にあった「独身であるときには厨房がない」という考え方も含めて、こっちの沼の東側の本来の場所っていうのがすごく神保さんちに近いんで、「ちょっとご飯食べたいなぁ、神保さん」「お風呂入りたい、神保さん」ってすぐに行けたんじゃないかなと思うんですね。その点はご承知おきください。

そんな条件で2003年から寄付いただいたりして、上棟して竣工して、今、こうやって続いてやっているということです。

最後が駆け足でしたが、今日は道造さんが、なんで浦和でヒアシンスハウスをつくりたかったのかなっていうところに、ちょっとだけ迫れたかなと思いますので、これで僕の話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

卒業設計　浅間山麓に位する藝術家コロニイの建築群

「住むものが独身であるときには厨房を欠いている。
これはロッヂに食事が常に用意されているからである」

２００３年４月２９日

ヒアシンスハウスをつくる集い

開催

２００３年９月

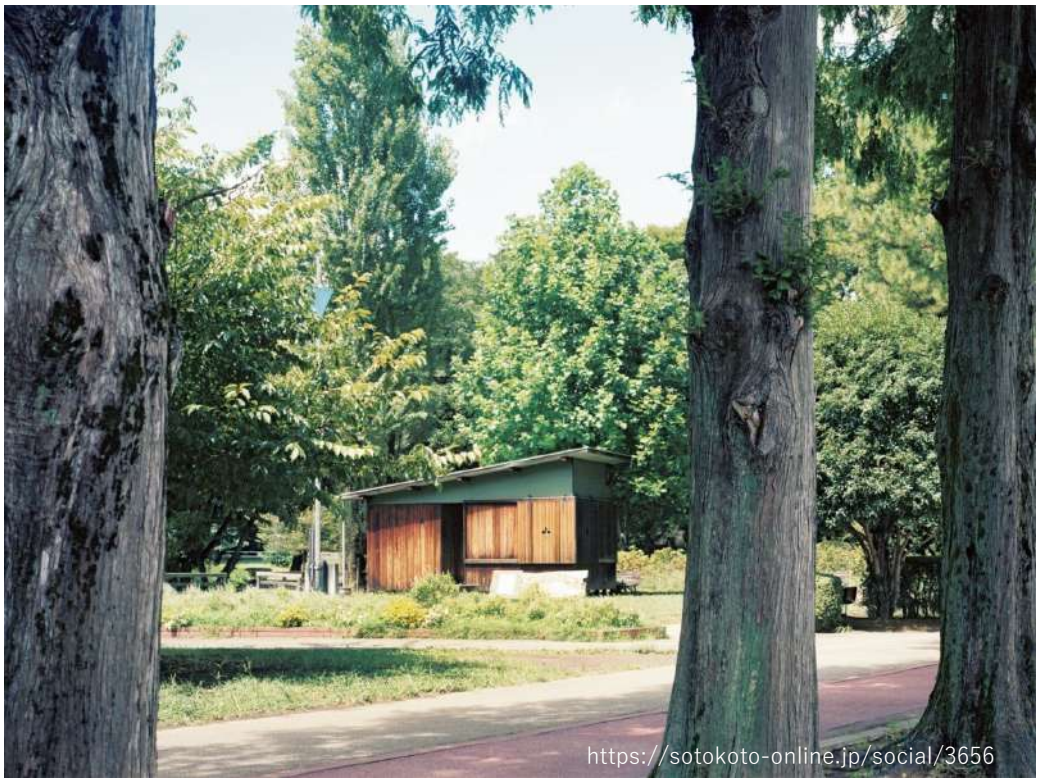
ヒアシンスハウス
をつくる会
寄付の募集開始

２００４年３月
着工

２００４年５月２３日
上棟

２００４年１１月６日
竣工式典

2005年春



# 第3部「清らかな水を求めて」

**青山 恭之 （あおやま やすゆき）** ＊プロフィールは第1部に掲載

## 水道タンクは浦和の水がいい象徴？

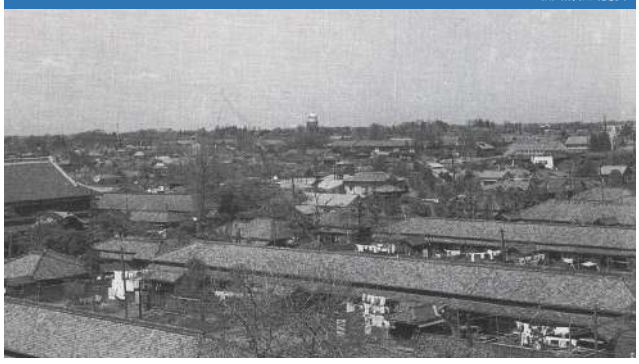
79
旧浦和市浄水場（浦和区）
かつてのランドマーク
埼玉の建築スケッチ
建築スケッチ

埼玉の建築スケッチ
№79
2014年3月27日
埼玉新聞

青山：今日、安野先生の話に、田園都市、つまり人が住宅として住む場所の条件として、高燥をなしていることがありましたけれども、水が、下水道、上水道が整備されていることもあったんです。今回僕はそれに注目して、鹿島台にあった浦和浄水場で、かつては県南水道って言って、埼玉県の南部にあった浦和、与野、大宮の３市にまたがる水を整備した団体の建築を見ていこうと思います。昭和初期の近代的なスタイル、モダニズムのスタイルを持った白くて清潔そうな建築、それが実はちょっと残ってたんですね。今日も「まちあるき」の中でひとつ、井戸の建物、取水場というのを見ましたけれども、つい最近まではその全体像が見えたので、それをちょっとお話ししたいと思います。

このスケッチは、僕が埼玉新聞に2012年ぐらいから連載しているんですけれども、79番だから前編が終わる少し前に、この浦和浄水場のことをスケッチとともに書きました。ここにあるように、浦和は水がいいっていうのを、おばあちゃんからよく言われたんですよね。おばあちゃんは荻窪の出身で、「窪」って言うぐらいだからやっぱり低いところなんですけれども、彼女が結婚して浦和に住み始めたら、浦和は水がいいんだ、それを口癖みたいに言ってました。それを支えたのが、実は昭和の初期に頑張ってくれた県南水道なんですね。そのことをちょっとこの時は記事にしたんです。

これは、浦高の先輩の建築家、細川清和さんがこの間、「歴史を学ぶ会」っていうのをやってくれまして、そこで見せてくれた浦和浄水場の水道タンクの写真なんですけども、これが昭和30年だったんです。僕は33年生まれなので、多分僕もちっちゃな頃は、こんな鹿島台の風景だったと思います。これ、撮影された位置は、おそらく県庁ぐらいしか高い建物がないので、県庁から北側の役人さんの住宅を超えて、左側に多分武道館って言われてる建物があるんですけれども、これが埼大附属小ですね。それ越しに、二階建てか平屋の家しかない



浦和浄水場の水道タンク
昭和30年
左：武道館（水道タンクの下は埼大付属小）
細川清和氏提供

黒っぽい日本家屋の甍（いらか）の向こうに、木々を遥かに超えて銀色の水道タンクがあった。これが、浦和は水があって豊かで清らかなっていう、高い位置の台地の上にすっくと建った近代化のイメージだったんじゃないかって、勝手に思ってるんです。

それを支えている清潔な建築のデザインっていうのが、実は結構重要だったんではないかと思います。あの水道タンクの足元は六間道路、幅が六間ある道路というのは当時は珍しかったぐらいに新しく東西に引かれた軸線の道、そこを通るたびにあの銀色のタンクが見えて、それを超えると下に下がってくる。ちょうど台地の際、まさに今、津村先生もおっしゃった「際」に建ってたんですね。

浦和浄水場の水道タンク
『記憶の中の風景』

これが40年代の写真ですけれど、本当に高い。ちょっとモダニズムっていうか。ここのは足が透けて見えるっていうか、本当にタンクがここに空中に舞っているような感じで、「あ、こんな高いものができたんだ」って、目を驚かせていたんですね。なんでこの下の車が水を撒いてるかっていうと、やっぱりまだ当時は舗装されてたのかな、僕もちっちゃい頃、わりと車でこの辺を通ってましたけど、なんか埃がすごかったような気もします。そこで、このタンク車は水がいっぱいあるぞっていうイメージだったのかもしれないんですけどね。

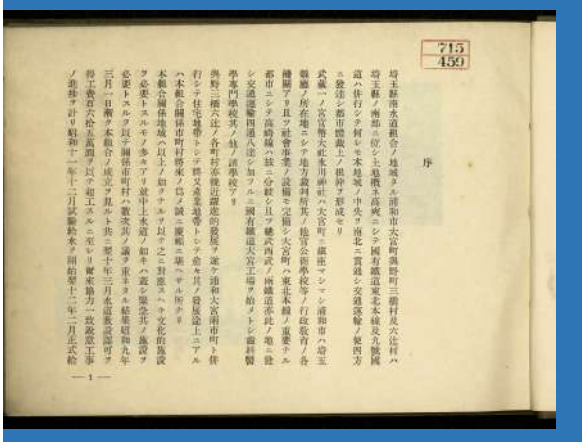
浄水場の水道タンクは、結構あちこちにシンボルとして残ってるんです。哲学堂（東京都中野区）のところにも（野方配水塔が）あるし、それから松戸の台地にやっぱり水道タンク（栗山配水塔）が、本庄市にも（児玉町旧配水塔が）あるんですよ。

## 昭和12年の埼玉県南水道組合抄誌にみる「高燥」

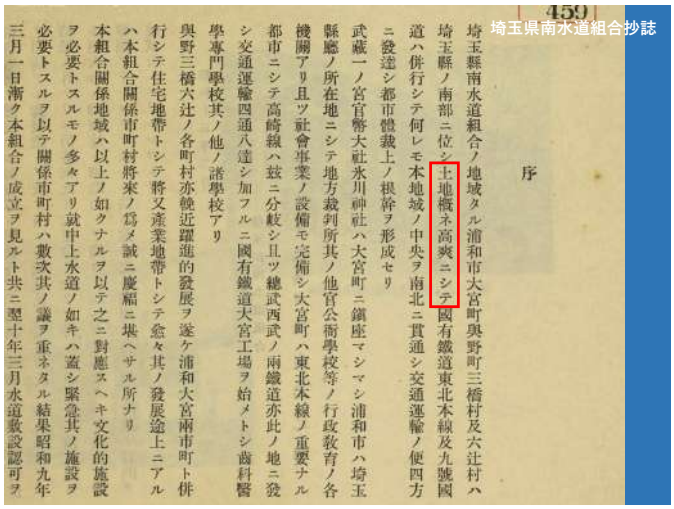
国立国会図書館
デジタルコレクション
埼玉県南水道組合抄誌

それで、国立国会図書館のデジタルコレクションに、「埼玉県南水道組合抄誌」っていう本を見つけました。すべてのページがPDF化されて見ることができます。そこに当時の建物の建築の写真が、わりと綺麗に示されています。これは序文なんですけれども、この一番初めのところに、浦和とか大宮とか与野と三橋村、六辻村は「埼玉県南部に位し土地概ね

埼玉県南水道組合抄誌



埼玉県南水道組合抄誌



高爽にし、」ここに高爽（燥）という字を見つけたんですね。だから、さっき、山海さんが「高燥」っていう字は誰も使わないって言ってたけど、昔はこういう大事な本の頭に、この「高燥（爽）」という字が、漢字は違いますけど「高爽にして」って出てくるんです。

撮影：2008年

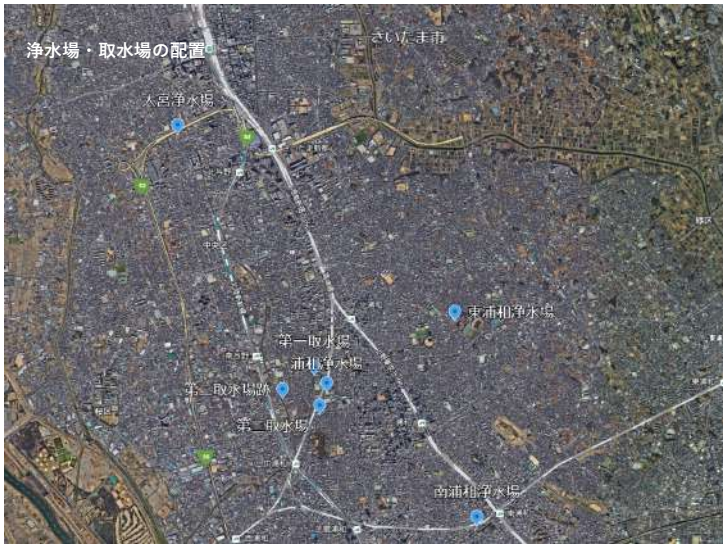
これがその写真なんですけれども、浄水場のところにこういう白いモダニズムの住宅、ちょっと洋風なイメージがあって、それがこの写真に出ていました。

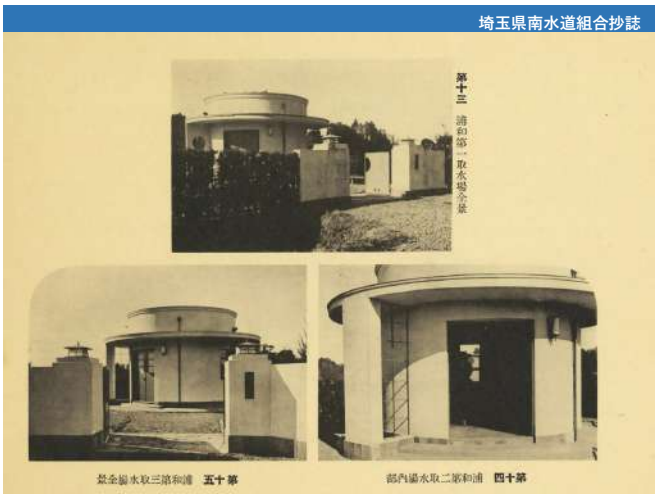
これが2008年、20年近く前にまだキラキラ輝いてた時代です。ここに、タンクがあったんです、このぐらいの高さで。その下に六角形の形の建物が残されてまして、それが確か、水道記念館とかいう形で展示されていたんです。僕は、水道記念館だからいつでも見に行けるなと思ってたら、すごく残念だったんですが壊されちゃったんです。足元にいろんな使わなくなった浄水器とか、タンク、モーター、そういうのが展示されていて残っていました。これは、その浦和浄水場の南側のアパートの階段を上がって行って写した写真です。

グーグルアース（Google Earth）で見ると、タンクの足元の骨組み、柱脚のところが六角形になっているのを残しながら記念館の建物を存続させた、とってもいいモニュメントだったと思いますけど、今はこれは全くなくなっちゃって、残念でしょうがない。

## 斬新でおしゃれな取水場の建物

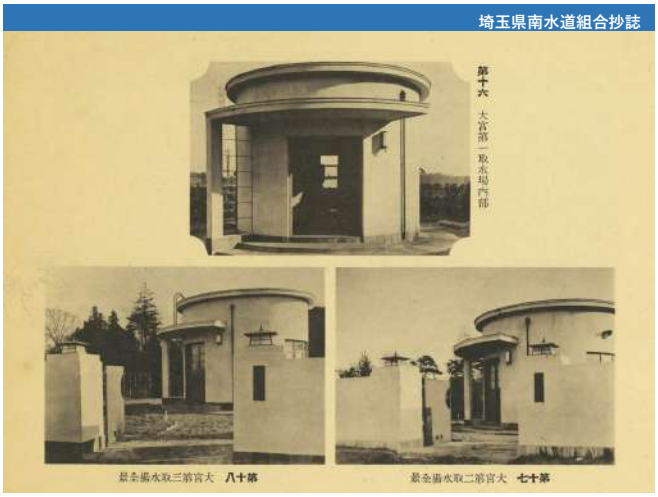
（下左写真）さいたま市の中での配置ですけれども、浦和は井戸の建物がいっぱい残っていて、南浦和駅のそばに南浦和浄水場、ここ駒場に東浦和浄水場。ここは大宮浄水場の位置なんですけども、そこにこんな建物（下右写真）があった。これは大宮浄





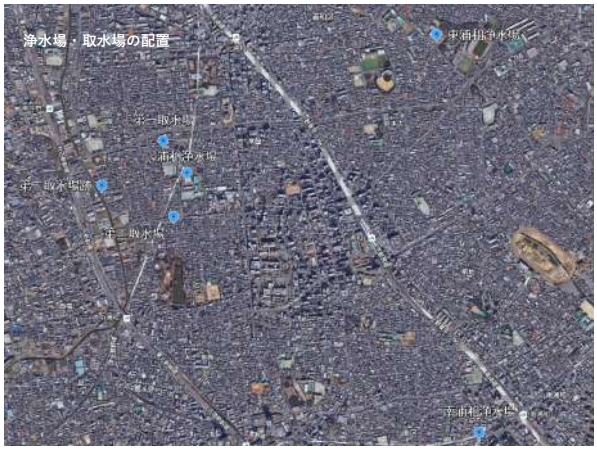

水場の全景なんですが、見てわかる通り、さっきの浦和と同じなんです。浦和も大宮も同じように、いい水道をつくろうということで、要するに基本設計を同じにして、同じ白い壁に洋風の丸窓がついた、こんなデザインで始まったということです。

これは井戸です。円形のボディ、それこそルネサンスのロトンダっていうか、丸い建築ですよね。井戸だから丸いって当たり前ですごい単純な話なんだけれども、それがすごく斬新で、だけどこの辺の意匠を見るとちょっとおしゃれな装飾がついてたりとかもあったということですね。これが浦和と大宮は一緒なんですよ、全く。大宮にも３つ、こういう形であったっていうことです。




ちょっとさっきの地図を拡大していますけれど、ここが大元の浦和浄水場で、１、２、３と３つの井戸があります。今日はまちあるきの時に第１だけ見ました。

これは東浦和ですね。こっち側に蓮昌寺というお寺があって、蓮昌寺の西側にある駒場体育館との間に今もあります。きれいな住宅と言ってもいいぐらいの意匠で、この下に水道の水入れタンクが入ってるんです。




これは南浦和にあるさいたま市水道局南浦和浄水場で、この間、隣にあるこのマンションの知り合いに屋上に上がらせてもらって、この写真を撮りました。ここに来ると、この南浦和から見る浦和が本当に台地の上にあるっていうのがすごくよくわかるんです。さらに大きなビルも建ってますから、こんなに高さが違うんだなっていうのがわかります。

これが第一次取水場、「浦和浄水場第1号給水場」

と勇ましい書き方ですけれども、やっぱりさっき白黒で見たより、周りの塀が簡素になっている。これは多分、すっかり住宅に囲まれてしまい、防犯とかそういう意味なんだと思います。

　これが第二取水場で、六間道路にある鴻沼川の西戸橋の辻のところにあったんですけれども、（右上写真）上はGoogle Earthのストリートビューで、下はGoogle Earthで真上から見ると本当にUFOが飛び降りてきたみたいな斬新な、未来的な、浦和の近代を感じるような小建築だったと思います。これは今の状態で、場所だけは残っているんですけれども、ここにパイプみたいのが通っているのは何か関わりがあるのかもしれないですね。

　これは第三取水場で、実際に行ってみると、土合浄水場と名前は変わってます。これが解体工事のところで、さっきと同じアングルです。ここ、大きな丘みたいになっている芝生の下にはでっかいプールがあったんですよ。このプールの壁が水色なんです。たまたま行った時に、壊されるっていうメッセージがあったので、例の住宅の上に上がって下を見た時なんですけれど、土の中に入れている水槽の内側の壁をなぜ水色に塗るかって、ちょっと浄水場建築の専門家じゃないと

わからないんですけども、こういう「粋」っていうか、なんかいいじゃないですか、そういうのって。最近の水道タンクとか、堰とかのコンクリートの塊に青い色を塗ったりするじゃないですか。それみたいなものがこういう土の中でもちゃんとやってたんだなと思って偉いなと思いました。

ここは、道に面してこれだけ残ってたアーチ型の門です。それが今やこういう形です。これだけでも残しておいてくれたらいいのに、ここまでやるのはちょっとなんかなと思いますけども。

## 鹿島台を「まちあるき」

これはフォーラムの前に開催した「まちあるき」のベースとした地図です。１時間で全てのポイントはまわれませんでしたが、歩いたルートを線で示してあります。

鹿島台というのは、東は県庁のあたりから西は別所沼の手前まで、北は県立近代美術館から南は別所沼の南の方にかけて広がる高台を指します。大正末から昭和初期に「耕地整理事業」によって、南北に直線を描く国道17号線を座標軸に、格子状の地割が整備されました。

ここでひとつひとつの街区に注目してみると、格子状とはいいながら、南北に長く東西が狭い短冊のようなかたちですね。これは南の日差しを重視する日本の住宅に配慮して、家々の日照環境がなるべく均一になるような配置計画と言えるでしょう。

それから、南北に通った道の幅が均一ではなく、幅の広い・狭いを交互に繰り返しているのは、三間幅の広い道はメインの車の通れる道で家の玄関側が向きあい、二間幅の狭い道はサービス用の人間の歩く道で家の勝手口側が向くように想定されていると考えられます。全ての道路

を４m以上と定めた戦後の建築基準法より、細やかに思えます。

　　さて、そこに建つ家々ですが、建設当初からのものがよく見ると残っています。基本的には木造平屋の日本家屋ですが、玄関の脇に応接間として洋室を設け、そこは外観も洋館の造りで、板壁に洋瓦のとんがり屋根が一種のはやりだったようです。建物を建て替えても、門構えはかつての姿を残すお宅も良く見かけます。生垣も多く残っていて、家と道の境がソフトで、心地よい住環境が感じられます。画家が多く住んでいたということもあって、アトリエ付き住宅の面影も窓の配置などから伺い知ることができました。

　住宅以外で注目すべきものに教会があります。№6はカトリックの教会。17号に面した古い教会は、跡見泰が描いた絵に姿を留めています。現在の教会の庭先に「キリシタン灯籠」が残っていて、江戸時代からの信者の存在をうかがわせます。№14はプロテスタントの教会で、お寺が無いのに新旧の教会が揃っているあたりも、この界隈の雰囲気というかカラーのようなものを感じますね。

　鹿島台という地名がはっきり示されているのは№8の「鹿島台公園」だけかもしれません。№17の「鹿島神社」では、境内の石碑の裏に、「鹿島臺」と旧字で刻んであったのを先程の「まちあるき」のなかで確認しましたね。この小さな神社こそが、鹿島台という名のルーツだと思いたいものです。その他は、「鹿島湯」という銭湯が現役で、遠くに煙突だけ見られた方もいらっしゃったでしょう。さらに付け足すと、県立浦和高校の校歌に「鹿島台」とはっきり歌われています。北浦和に移る前、県知事公館のあたりにあった名残です。

　No.23は日本赤十字社埼玉県支部旧社屋の建物があったのが、今、移築されて嵐山町にあります。裏にはお偉い人が使用するトイレがあって、こんな六角形の建物で、真ん中で男女に分かれていたんだけど、これは小川町に移築されてから、この病院のお茶室として使っています。四畳半の畳の間が真ん中にドンとあって、丸柱が６本残っていて、真ん中に炉が切ってある。日向亭と言って、昭和57年に移してきた時の院長先生の言葉がちゃんと残っている。

　これは同じ赤十字の敷地の中にあった中野四郎さんの彫刻です。これが、なかなか外から見えにくかったんですけど、最近になって調公園の西側に赤十字の埼玉支社というのが移ってきて、そこに移築されたので、道からよく見ることができます。

これが僕のスケッチなんですけど、中野四郎さんはコンクリートを使った、肉厚な感じの作品を作りますよね。なんでこれはこんな繊細なんだろうって、ずっと気になってたんですよね。そしたら、さいたま市の図書館に中野四郎の作品集があって、それを見たらこの作品が出ていて、赤十字に聞いてみたんです。すると、これは赤十字看護専門学校の学生さんをきちっと表現したっていうことがわかって、聞いてよかったなと。中野四郎は肉厚な作品をつくる人かと思ったら、こういうすごく存在感のあるものもつくる。この赤十字のメダルみたいなのをつけて手袋をギュッと握っている感じとか、表情もすごくいい。この作品が調公園の西にあります。

## 耕地整理の碑に刻まれた「高燥」

最後、これは安野先生のスライドで出てくるかなと思ってたんですけれども。調公園の西・北の角に三角形の飛び地があって、そこに古い欅の古木があるんです。その三角形の土地の中に耕地整理の碑という非常に大きな石碑があります。この中の冒頭に「浦和は皇城の北門の鎖たり」だから、皇城の北からつながっている土地だと。その後に「土地は高燥閑静にして」とあったんですよ。これは「高燥」の「燥」の字が「火編」が付いていて、今回のパンフレットに使った文字と一緒でした。これがすごく鋭い字で深く刻まれていて、高々と掲げられている。これが自分の住んでいる家から百メートルぐらいのところにあったとは、ほんと、最近気づいたんです。その冒頭のところに「浦和は高燥で閑静だ」って言われていたという。

今日、本当はここまで「まちあるき」ができるとよかったんですけど。どうもご清聴ありがとうございました。

## トークセッション

### 水辺こそが憩いの場、癒しの場では？

青山：うらわ美術館の元学芸員の島田有美子さん、前回のこのフォーラムで浦和画家の話をされて、今日、聞いていただいて感想をひとつお願いできますか。

島田：今日は大変興味深く伺いました。耕地整理のこととかを改めて伺ってすごく面白かったです。立原道造のヒアシンスハウスが今あるところの反対側に計画されていたという話も初めて知って面白かったです。

先ほど津村先生がおっしゃったように、高台と低地のコントラストで言った時に、人工の構造と低地の自然みたいな話が出てきて、健康には確かに高台がいいと思いますし、上下水道が完備された快適な住まいっていうことは確かにあるなと思うんですけれども、一方で人間が憩う場合には、意外と水辺というのは非常にいいところで、例えば東京だと山の手、川の手っていう形で、隅田川が持つ情緒性とか、氷川公園の水辺、見沼川畔とか、川の畔に伝統的なお茶屋さんとかができるっていうことがあるので、その根源的な憩いの場ってどっちなんだろうって、ちょっと伺っていてすごくモヤモヤしたところなんですけれども。

安野：ありがとうございます。確かに水辺というのは人も行き交うし、昔は水運というのもあって、そこに河岸ができたり、それから農業をする弥生時代だと、田圃の近くに集落ができたりするんですけれども、一方で洪水がある。デメリット、メリットの両方があると思うんですね。縄文時代には平らな台地が住まう場所に選ばれていて、両方、行ったり来たりしてるんだろうなと思うんです。

近代になってからは、特に病気というものを科学的に見ようという視点が出てきて、ロベルト・コッホっていう科学者が細菌を発見し、瘴気というもの自体はなかったというのがわかった。メカニズムは違うんだけれども、やっぱり科学的に見るといずれにしろ高台の方が健康地だっていうことは変わらずということから、高台が住宅地として認識されていくというのは、特にこの時代には強かったのではないだろうかということですね。

さっき「埼玉県南水道組合抄誌」では、高燥の「燥」が「爽」という字に変ってましたけども、実際その高台の住宅地に行くと、爽やかな感じ、ちょっとわかるんですよ。そういった感性を通じて当時の人も理解しつつあったのではないか、特に当時はグローバル化して病原菌が入ってくるようになっていたので、衛生ということにことさら、今よりはるかに関心が持たれていた。それがいつしかそれなりに環境も整って、病気もそれなりに克服されて、病気に対する感受性が鈍ってるからこそ、ちょっと低い方に行くっていうこともありなのかなというふうになったのかもしれない。

ただその「際」、街と田舎の境目というものはどこかにあった方がいいっていうのは当時からあって、田園都市なんかもある程度、中世都市をイメージしてたと思うんですけれど、街のところと田園のところの際があって、田園が周囲にちゃんとあるということが人間性というものをちゃんと確保できる。そういったところが今はなくなってきちゃってる

から、そこは寂しいなと思いつつ、水辺というところが、そういうことを感じられる場所として、癒しをもとめられるといった価値が出てきているのかなと思いますね。

津村：おそらくそれまでの多くの人々は仕事をする場と住むところが一緒で、いわゆる職住一致だったのが、明治後半から昭和初期にかけてそれこそサラリーマン層が増えてきて、昼間のお仕事とは関わらなくてもいい専用住宅が必要になってきたわけです。畑作ならまだしも稲作中心の農業と密接であればあるほど高台ではなかなか難しくて、近代になって専用の住宅地が必要となってきたときに、それまで水田なんかできないよねというような高台がむしろ住宅地としては適していて、そこにサラリーマンの専用住宅がどんどんできていく。そうなると、農地と住宅地の境っていうだいたい水辺になっているところがフリンジみたいになっていって、農地と住宅地を結節するような意味でのレクリエーションであったり憩いの場であったり、そこにまたちょっと自然回帰的な発想をする奥瀬さんみたいな画家さんや抒情詩人だとか、そういう方々がその面に着目していくというのはあるのかなと、こう見てきてつくづく思うんですけどね。

## 隅切りから見える大宮と浦和の区画の違い

参加者A：安野先生にお伺いしたいんですが、大宮の区画整理では隅切りが一個おきにあって、浦和の方はそういうのはないっていうお話を聞いたんですけど、隅切りっていうのは、私のイメージだと細い道にあった方が曲がりやすいのに、なぜ大きい道の方にあるのかなっていうのが素朴に感じた疑問なんです。

安野：そうですよね、私もその方がバランスがとれるような気がするんですけど、なぜだろうかっていうのはわかってなくて。それでも、広い道に車両が通って、細い道はそんなに通らないようにっていうことなのかなとは思っているんです。

大宮の場合は、細い道と太い道の両者に区画の土地が面していて、両方からアクセスできるようにしてたのかもしれない。それがいつしか、北と南を半分に割って、片側の道からだけアクセスするように細分化されたのかもしれない。だから、歩行者専用じゃないにしても、歩行者が通りやすい道というのを意識したのかもしれないなとは思っています。

実際、私も堀の内というところに住んでいて、うちは広い道に面していて、むしろそこの広い道で子供が遊ぶんですね。細い道はちょっと家が近いので遊びにくいのか、あまり遊ばなかった。車両の観点からすると逆なんですけれど、その違いというのは子供ながらに感じているところはありましたね。

浦和の場合は、どうなんだろうな。ああいった形は農地に使われていて、農地の形をそのまま持ってきているような気がするんです。隅切りは車だと思うんですけども、どうやって決めているのかは探しても出てこなくて。南北に長い区割りにすると脇から日が当たるので、稲の収穫に差が出ないということが書いてありましたから、やはりその形だと農地にも対応することを考えたのかもしれないですけど、それもちょっとわかんないです。

参加者A：面白い話をありがとうございました。

青山：このフォーラムは、「美術と街巡り・浦和」という企画の中のひとつになってます。その展覧会「エスプラナード展」「どこかでお会いしましたね展」をまだやってます。どうぞお立ち寄りください。ありがとうございました。

***本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。**